

ヨブ記

Job

旧約聖書

第1章

- 1 ウツの地に、その名をヨブという人がいた。この人は誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっていた。
- 2 彼に七人の息子と三人の娘が生まれた。
- 3 彼は羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それに非常に多くのしもべを所有していた。この人は東の人々の中で一番の有力者であった。
- 4 彼の息子たちは互いに行き来し、それぞれ自分の順番の日に、家で宴会を開き、人を遣わして彼らの三人の姉妹も招き、よく一緒に食べたり飲んだりしていた。
- 5 宴会の日が一巡すると、ヨブは彼らを呼び寄せて聖別した。朝早く起きて、彼ら一人ひとりのために、それぞれの全焼のささげ物を献げたのである。ヨブは、「もしかすると、息子たちが罪に陥って、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた。
- 6 ある日、神の子らがやって来て、主の前に立った。サタンもやって来て、彼らの中にいた。
- 7 主はサタンに言われた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは主に答えた。「地を歩き回り、そこを歩き回って来ました。」
- 8 主はサタンに言われた。「おまえは、わたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もいない。」
- 9 サタンは主に答えた。「ヨブは理由もなく神を恐れているのでしょうか。」
- 10 あなたが、彼の周り、彼の家の周り、そしてすべての財産の周りに、垣を巡らされたのではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地に増え広がっているのです。
- 11 しかし、手を伸ばして、彼のすべての財産を打ってみてください。彼はきっと、面と向かってあなたを呪うに違いありません。」
- 12 主はサタンに言われた。「では、彼の財産をすべておまえの手に任せる。ただし、彼自身には手を伸ばしてはならない。」そこで、サタンは主の前から出て行った。
- 13 ある日、彼の息子、娘たちが、一番上の兄の家で食べたりぶどう酒を飲んだりしていたとき、
- 14 一人の使者がヨブのところにやって来て言った。「牛が耕し、そのそばでろばが草を食べていると、
- 15 シェバ人が襲いかかってこれを奪い取り、若い者たちを剣の刃で打ち殺しました。私一人だけが逃れて、あなたに知らせに参りました。」
- 16 この者がまだ話している間に、もう一人が来て言った。「神の火が天から下って、羊と若い者たちを焼き滅ぼしました。私一人だけが逃れて、あなたに知らせに参りました。」
- 17 この者がまだ話している間に、もう一人が来て言った。「カルデア人が三組になって、らくだを襲い、これを奪い取り、若い者たちを剣の刃で打ち殺しました。私一人だけが逃れて、あなたに知らせに参りました。」
- 18 この者がまだ話している間に、もう一人が来て言った。「あなたのご息子やお嬢さんたちは、一番上のお兄さんの家で食べたりぶどう酒を飲んだりしておられました。
- 19 そこへ荒野の方から大風が吹いて来て、家の四隅を打ち、それがお若い方々の上に倒れたので、皆様亡くなられました。私一人だけが逃れて、あなたに知らせに参りました。」

- 20 このとき、ヨブは立ち上がって上着を引き裂き、頭を剃り、地にひれ伏して礼拝し、
- 21 そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」
- 22 ヨブはこれらすべてのことにおいても、罪に陥ることなく、神に対して愚痴をこぼすようなことはしなかった。

第2章

- 1 ある日、神の子らがやって来て、主の前に立った。サタンも彼らの中にやって来て、主の前に立った。
- 2 主はサタンに言われた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは主に答えた。「地を歩き回り、そこを歩き回って来ました。」
- 3 主はサタンに言われた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように、誠実に直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もいない。彼はなお、自分の誠実さを堅く保っている。おまえは、わたしをそそのかして彼に敵対させ、理由もなく彼を呑み尽くそうとしたが。」
- 4 サタンは主に答えた。「皮の代わりは、皮をもってします。自分のいのちの代わりには、人は財産すべてを与えるものです。」
- 5 しかし、手を伸ばして、彼の骨と肉を打ってみてください。彼はきっと、面と向かってあなたを呪うに違いありません。」
- 6 主はサタンに言われた。「では、彼をおまえの手に任せる。ただ、彼のいのちには触れるな。」
- 7 サタンは主の前から出て行き、ヨブを足の裏から頭の頂まで、悪性の腫物で打った。
- 8 ヨブは土器のかけらを取り、それでからだを引っかいた。彼は灰の中に座っていた。
- 9 すると、妻が彼に言った。「あなたは、これでもなお、自分の誠実さを堅く保とうとしているのですか。神を呪って死になさい。」
- 10 しかし、彼は妻に言った。「あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざいも受けるべきではないか。」ヨブはこのすべてのことにおいても、唇によって罪に陥ることはなかった。
- 11 さて、ヨブの三人の友が、ヨブに降りかかったこれらすべてのわざわいのことを聞き、それぞれ自分のところから訪ねて来た。すなわち、テマン人エリファズ、シュア人ビルダデ、ナアマ人ツォファルである。彼らはヨブに同情し、慰めようと、互いに打ち合わせて来た。
- 12 彼らは遠くから目を上げて彼を見たが、それがヨブであることが見分けられなかった。彼らは声をあげて泣き、それぞれ自分の上着を引き裂き、ちりを天に向かって投げ、自分の頭の上にまき散らした。
- 13 彼らは彼とともに七日七夜、地に座っていたが、だれも一言も彼に話しかけなかった。彼の痛みが非常に大きいのを見たからである。

第3章

- 1 そのようなことがあった後、ヨブは口を開いて自分の生まれた日を呪った。

- 2 ヨブは言った。
- 3 私が生まれた日は滅び失せよ。「男の子が胎に宿った」と告げられたその夜も。
- 4 その日は闇になれ。神も上からその日を顧みるな。光もその上を照らすな。
- 5 闇と暗黒がその日を取り戻し、雲がその上にとどまれ。昼を薄暗くするものも、その日を脅かせ。
- 6 その夜は、暗闇が奪い取るように。その日は、年の日々の中で喜ばないように。月の日数のうちにも入れないように。
- 7 見よ、その夜は不妊となるように。その夜には喜びの声も起こらないように。
- 8 日を呪う者たちが、レビヤタンを巧みに呼び起こす者たちが、その日に呪いをかけるように。
- 9 その夜明けの星は暗くなれ。光を待っても、それはなく、暁のまばたきを見ることがないように。
- 10 その日が、私をはらんだ胎の戸を閉ざさず、私の目から労苦を隠してくれなかったからだ。
- 11 なぜ私は、胎内で死ななかったのか。胎を出たとき、息絶えなかったのか。
- 12 なにゆえ、両膝が私を受けとめたのか。乳房があって、私がそれを吸ったのか。
- 13 今ごろ私は安らかに横になり、眠って安らいでいただろうに。
- 14 自分たちのためにあの廃墟を築いた王たち、地の指導者たちと一緒に。
- 15 黄金を持ち、自分の家を銀で満たした首長たちと一緒に。
- 16 なぜ私は、ひそかに墮ろされた死産の子、光を見なかった嬰兒のようにならなかったのか。
- 17 かしこでは、悪しき者は荒れ狂うのをやめ、かしこでは、力の萎えた者は憩い、
- 18 捕らわれ人たちもみな、ともに安らかで、激しく追い立てる者の声も聞こえない。
- 19 かしこでは、下の者も上の者も同じで、奴隷も主人から解き放たれている。
- 20 なぜ、苦悩する者に光が、心の痛んだ者にいのちが与えられるのか。
- 21 彼らは死を待つが、死はやって来ない。隠された宝にまさって死を探し求めても。
- 22 彼らは墓を見出したときに、歓声をあげて喜び楽しむ。
- 23 自分の道が隠されている人、神が囲いに閉じ込めた人に なぜ光が与えられるのか。
- 24 まことに、食物の代わりに嘆きが私に来て、私のうめきは水のようにあふれ出る。
- 25 私がおびえていたもの、それが私を襲い、私が恐れていたもの、それが降りかかったからだ。
- 26 安らぎもなく、休みもなく、憩いもなく、心は乱れている。

第4章

- 1 すると、テマン人エリファズが話し始めた。
- 2 もし、人があなたにことばを投げかけたら、あなたはそれに耐えられるか。しかし、だれが語らないでいられるだろう。
- 3 見よ。あなたは多くの人を訓戒し、弱った手を力づけてきた。
- 4 あなたのことばは、つまずいた者を起こし、くずおれる膝をしっかりとさせてきた。

- 5 しかし今、これがあなたに及ぶと、あなたはそれに耐えられない。これがあなたに至ると、あなたはおじ惑う。
- 6 あなたの敬虔さは、あなたの確信ではないか。あなたの誠実さは、あなたの望みではないか。
- 7 さあ、思い出せ。だれか、潔白なのに滅びた者があるか。どこに、真っ直ぐなのに絶たれた者があるか。
- 8 私の見てきたところでは、不法を耕して 害悪を蒔く者が、自らそれらを刈り取るのだ。
- 9 彼らは神の息吹によって滅び、御怒りの息によって消え失せる。
- 10 獅子のうなり声、たける獅子の音がする。しかし、若獅子の牙は砕かれる。
- 11 雄獅子は獲物がなくて滅び、雌獅子の子らは散っていく。
- 12 あることばが私に忍び寄り、そのささやきを私の耳がとらえた。
- 13 夜の幻で思いが乱れ、深い眠りが人々を襲うとき、
- 14 おののきと震えが私に降りかかり、私の骨々の多くがわなないた。
- 15 ある霊が顔の上を通り過ぎ、私は身の毛がよだった。
- 16 それは立ち止まったが、私はその顔だちを見分けられなかった。しかし、その姿は私の目の前にあった。静寂。そして私は次のような声を聞いた。
- 17 「人は神の前に正しくあり得ようか。その造り主の前にきよくあり得ようか。
- 18 見よ。神はご自分のしもべさえ信頼せず、御使いたちのうちにさえ、誤りを認められる。
- 19 まして、ちりに土台を据えた泥の家に住む者は なおさらのこと。彼らはシミよりもたやすく押しつぶされ、
- 20 朝から夕方まで打ち砕かれ、永久に滅ぼされて、だれも顧みない。
- 21 彼らの天幕の綱は確かに取り去られる。彼らは知恵がないために死ぬ。」

第5章

- 1 さあ、呼んでみよ。だれかあなたに答える者はいるか。聖なる者のうちのだれのところにあなたは向かうのか。
- 2 苛立ちは愚か者を殺し、ねたみは浅はかな者を死なせる。
- 3 私は愚か者が根を張るのを見て、ただちにその住まいを呪った。
- 4 その子たちは安全からはほど遠く、門で押しつぶされても、救い出す者もいない。
- 5 愚か者が刈り入れた物は、飢えた人が食べ、茨の中からさえそれを奪う。渴いた人たちが彼らの富をあえぎ求める。
- 6 まことに、不幸はちりから出て来ることはなく、労苦は土から生え出ることはない。
- 7 まことに、人は労苦のために生まれる。火花が上に向かって飛ぶように。
- 8 私なら、神に尋ね、神に向かって自分のことを訴えるだろう。
- 9 神は、測り知れない大いなることをなし、数えきれない奇しいみわざを行われる。
- 10 地の上に雨を降らせ、野の面に水を送られる。
- 11 神は低い者を高く上げ、嘆き悲しむ者は安全なところに引き上げられる。
- 12 神は悪賢い者たちの企みを打ち砕かれ、彼らの手は良い成果を得られない。

- 13 神は知恵のある者を、彼ら自身の悪巧みによって捕らえ、彼らのねじれたはかりごとは突然終わる。
- 14 彼らは昼間に闇と出会い、真昼でも、夜のように手探りする。
- 15 神は貧しい者を剣から、剣の刃から、強い者の手から救われる。
- 16 こうして弱い者は望みを抱き、不正は口をつぐむ。
- 17 ああ、幸いなことよ、神が叱責するその人は。だから、全能者の訓戒を拒んではならない。
- 18 神は傷つけるが、その傷を包み、打ち砕くが、御手で癒やしてくださるからだ。
- 19 六つの苦しみから、神はあなたを救い出し、七つの中でも、わざわざはあなたに触れない。
- 20 飢饉のときには、あなたを死から、戦いのときには、剣の力から贖い出す。
- 21 舌のむちで打たれるときも、あなたは隠され、破壊がやって来ても、恐れることはない。
- 22 あなたは破壊と飢饉をあざ笑い、地の獣をさえ恐れることはない。
- 23 野の石とあなたは契りを結び、野の獣があなたと和らぐからだ。
- 24 あなたは自分の天幕が安全であるのを知り、自分の牧場を見回っても、何も失っていない。
- 25 あなたは自分の子孫、自分の末裔が、地の青草のように増えるのを知る。
- 26 あなたは長寿を全うして墓に入る。あたかも麦束が、時が来ると収められるように。
- 27 さあ、私たちが調べ上げたことはこのとおりだ。これを聞き、自分自身でこれを知れ。

第6章

- 1 ヨブは答えた。
- 2 ああ、私の苦悶の重さが量られ、私の破滅が、ともに秤にかけられたらよいのに。
- 3 きっと海の砂よりも重いだらう。だから、私のことばは激しかったのだ。
- 4 まことに、全能者の矢が私に刺さり、その毒を私の霊が飲み、神の脅威が私に対して準備されている。
- 5 野ろばが若草の上で鳴くだろうか。雄牛が飼葉の上でうなるだろうか。
- 6 味の無い物は塩なしに食べられるだろうか。卵の白身に味があるだろうか。
- 7 私の喉はそれを受けつけない。それらは私には腐った食物のようだ。
- 8 ああ、私の願いがかなえられ、私が望むものを神が下さるとよいのに。
- 9 神が望むままに私を砕き、御手を伸ばして私を絶たれるのであれば、
- 10 それはなおも私にとって慰めであり、容赦ない激痛の中でも、私は小躍りして喜ぶ。私は聖なる方のことばを、拒んだことはない。
- 11 私にどんな力があるのだろうか。私が待たなければならないとは。どんな終わりがあるのだろうか。耐え忍ばなければならないとは。
- 12 私の力は石の力なのか。私の肉は青銅なのか。
- 13 私のうちには何の助けもないではないか。すぐれた知性は、私から取り払われている。
- 14 落胆している者には、友からの友情を。さもないと、全能者への恐れを捨てるだらう。
- 15 兄弟たちは水無し川のように私を裏切った。流れが去る川床のように。
- 16 それは氷で黒ずみ、雪で隠される。
- 17 炎天のころには、流れがなくなり、暑くなるとその場所から消える。

- 18 隊商はその道筋からそれ、荒れ地に上って滅びる。
- 19 テマの隊商はこれを目印とし、シェバの旅人はこれに望みをかける。
- 20 彼らはこれに頼ったために恥を見、そこまでやって来て、辱めを受ける。
- 21 今や、あなたがたはそのようになった。あなたがたは恐ろしいことを見ておびえている。
- 22 私が言ったことがあるか。「私に贈り物をせよ」と。「あなたがたの財産の中から私のために賄賂を贈れ」と。
- 23 あるいは「敵の手から私を救い出せ。横暴な者たちの手から私を贖い出せ」と。
- 24 私に教えよ。そうすれば、私は黙ろう。私がどのように迷い出たのか、私に悟らせよ。
- 25 真っ直ぐなことばは、なんと痛いことか。あなたがたは自分で何を責め立てているのか。
- 26 ことばで私を責めるつもりか。絶望している者のことばを、風と見なすつもりか。
- 27 あなたがたは、みなしごをくじで分け合い、自分の友さえ売りに出す。
- 28 今、ぜひ、私の方に顔を向けてくれ。あなたがたの顔に向かって私は決してまやかしを言わない。
- 29 思い直してくれ。不正があってはならない。思い直してくれ。私の正しさが問われているのだ。
- 30 私の舌に不正があるだろうか。私の口は破滅を見極められないだろうか。

第7章

- 1 地上の人間には苦役があるではないか。その日々は日雇い人の日々のようではないか。
- 2 日陰をあえぎ求める奴隷のように、賃金を待ち焦がれる日雇い人のように、
- 3 そのように、私には徒労の月日が割り当てられ、労苦の夜が定められている。
- 4 私は横になるときに言う。「いつ起き上がるだろうか」と。夜は長く、私は夜明けまで寝返りを打ち続ける。
- 5 私の肉は、うじ虫と土くれをまとい、皮膚は固まっては、また崩れる。
- 6 私の日々は機の杼よりも速く、望みのないままに終わる。
- 7 心に留めてください。私のいのちが息にすぎないことを。私の目は、再び幸いを見ることはありません。
- 8 私を見る人の目は、もう私を認めることはありません。あなたが私に目を留められても、私はもういません。
- 9 雲は消え去ります。そのように、よみに下る者は上っては来ません。
- 10 その人はもう自分の家には帰れず、彼の家も、もう彼のことが分かりません。
- 11 ですから、私も自分の口を制することをせず、霊の苦しみの中で語り、たましいの苦悩の中で嘆きます。
- 12 私は海でしょうか、それとも竜でしょうか。あなたが私の上に見張りを置かれるとは。
- 13 寝台が私を慰め、寝床が嘆きを負ってくれると私が思っても、
- 14 あなたは、いくつもの夢で私をおののかせ、幻によって私をおびえさせます。
- 15 私のたましいは窒息を、私のからだではなく死を選びます。

- 16 もういやです。いつまでも生きたくありません。かまわないでください。私の日々は空しいものです。
- 17 人とは何ものなのでしょう。あなたがこれを尊び、これに心を留められるとは。
- 18 朝ごとにこれを訪れ、その都度これを試されるとは。
- 19 いつまで私から目をそらしてくださらないのでか。唾を飲み込む間も、私を放っておいてくださらないのでか。
- 20 私が罪ある者だとしても、人を見張るあなたに、私は何ができるでしょう。どうしてあなたは、私を標的とされるのですか。私は、自らを重荷としなければならないのですか。
- 21 どうして、あなたは私の背きを赦さず、私の咎を取り去ってくださらないのでか。私が今も、ちりに横たわらなければならないとは。あなたが私を捜しても、私はもういません。

第8章

- 1 次に、シュア八人ビルダデが答えた。
- 2 いつまで、あなたはこのようなことを語るのか。あなたが口にするこばは激しい風だ。
- 3 神がさばきを曲げられるだろうか。全能者が義を曲げられるだろうか。
- 4 もし、あなたの子らが神の前に罪ある者となり、神が彼らをその背きの手に渡されても、
- 5 もし、あなたが熱心に神に求め、全能者にあわれみを乞うなら、
- 6 もし、あなたが純粹で真っ直ぐなら、今すぐ神はあなたのために奮い立ち、あなたの義の住まいを回復されるだろう。
- 7 あなたの始まりは小さくても、あなたの終わりは、きわめて大きなものとなる。
- 8 さあ、先人に尋ねよ。先祖たちの探究したことを確かめよ。
- 9 私たちは昨日からの者で、何も知らない。私たちの地上の日々は影にすぎないのだ。
- 10 彼らはあなたに教え、あなたに語りかけ、その心からこばを発しないだろうか。
- 11 パピルスは沼地がなくても育つだろうか。葦は水がなくても伸びるだろうか。
- 12 まだ若芽のときに、引き抜かれもしないのに、ほかの草に先立って枯れる。
- 13 すべて神を忘れる者の道はこのようだ。神を敬わない者の望みは消え失せる。
- 14 その人の確信は、か細いクモの糸、その信頼はクモの巣だ。
- 15 自分の家に寄りかかると、家はそれに耐えきれない。これにすがりついても、それは持ちこたえない。
- 16 神を敬わない者は日に当たって青々と茂り、その若枝は庭に生え出る。
- 17 その根は石塚に絡まり、石造りの家に生え広がる。
- 18 しかし、彼がその場所から取り除かれるなら、その場所は、彼を見たことがない、とうそぶく。
- 19 見よ、これこそが彼の道の喜びである。その土からは、ほかのものが生え出る。
- 20 見よ。神は誠実な人を退けることはなく、悪を行う者の手を取ることはない。
- 21 神は、ついには笑いをあなたの口に、喜びの叫びをあなたの唇に満たされる。
- 22 あなたを憎む者は恥を身にまとい、悪しき者の天幕はなくなる。

第9章

- 1 ヨブは答えた。
- 2 そのとおりであることを、私は確かに知っている。しかし、人はどのようにして、神の前に正しくあり得るのか。
- 3 たとえ、神と言い争いたいと思っても、千に一つも答えられないだろう。
- 4 神は心に知恵のある方、力の強い方。この神に対して頑なになって、だれが、そのままですむだろうか。
- 5 神は山々を移されるが、山々は気づかない。神は怒って、それらをくつがえされる。
- 6 神が地をその基で震わせられると、その柱は揺れ動く。
- 7 太陽にお命じになると、それは昇らず、星もまた封じ込められる。
- 8 神はただひとりで天を延べ広げ、海の大波を踏みつけられる。
- 9 神は牡牛座、オリオン座、すばる、それに南の天の間を造られた。
- 10 大いなることをなさって測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない。
- 11 神がそばを通り過ぎてても、私には見えない。進んで行っても、気づかない。
- 12 ああ、神が奪い取ろうとされるとき、だれがそれを引き止められるだろうか。だれが神に向かって、「何をするのか」と言えるだろうか。
- 13 神は御怒りを翻されない。ラハブの仲間も、神のみもとに身をかがめる。
- 14 まして、この私が神に答えられるだろうか。神と交わすべきことばを私が選べるだろうか。
- 15 たとえ私が正しくても、答えることはできない。私をさばく方に対して、あわれみを乞うだけだ。
- 16 私が呼び、私に答えてくださったとしても、神が私の声に耳を傾けられるとは、信じられない。
- 17 神は嵐をもって私を傷つけ、理由もなく傷を増し加え、
- 18 私に息もつかせず、私を苦しみで満たされる。
- 19 もし、力のことなら、見よ、神は強い。もし、さばきのことなら、だれが私を呼び出すのか。
- 20 たとえ私が正しくても、私自身の口が私を不義に定める。たとえ私が誠実でも、神は私を曲がった者とされる。
- 21 私は誠実だ。しかし私には自分が分からない。私は自分のいのちを憎む。
- 22 みな同じことだ。だから私は言う。神は誠実な者も悪い者も、ともに絶ち滅ぼされると。
- 23 突然、にわか水が出て人を死なせると、神は潔白な者の受ける試練を嘲られる。
- 24 地は悪しき者の手に委ねられ、神は地のさばき人らの顔をおおわれる。神がなさるのでなければ、だれがそうするのか。
- 25 私の日々は飛脚よりも速い。それは飛び去って、幸せを見ることはない。
- 26 それは葦の舟のように通り過ぎる。獲物をめがけて舞い降りる鷲のように。
- 27 たとえ「不平を忘れ、悲しい顔を捨てて明るくふるまいたい」と私が言っても、
- 28 自分のあらゆる苦痛に私はおびえています。私はよく知っています。あなたが私を潔白な者となさらないことを。

- 29 私はきっと、悪しき者とされるでしょう。なぜ私は、空しく労するのでしょうか。
- 30 たとえ私が雪の水で身を洗っても、灰汁で手を清めても、
- 31 あなたは私を墓の穴に沈め、私が着る服は私を忌み嫌います。
- 32 神は、私のように人間ではありません。その方に、私が応じることができるのでしょうか。
「さあ、さばきの座と一緒に行きましょう」と。
- 33 私たち二人の上に手を置く仲裁者が、私たちの間にはいません。
- 34 神がその杖を私から取り去り、その恐ろしさが私をおびえさせませんように。
- 35 そうなれば、私は恐れず神に語りかけます。しかし今、私はそうではありません。

第10章

- 1 私のたましいはいのちを忌み嫌う。私は不平をぶちまけ、たましいの苦しみのうちに私は語ろう。
- 2 私は神にこう言おう。「私を不義に定めないでください。何のために私と争われるのかを教えてください。
- 3 あなたが人を虐げ、御手の労苦の実を蔑み、悪しき者たちのはかりごとに光を添えることは、あなたにとって良いことでしょうか。
- 4 あなたには肉の目があるのですか。あなたは人間が見るように見られるのですか。
- 5 あなたの日々は人間の日々のようなのですか。あなたの年は人の年のようなのですか。
- 6 それで、私の咎を探し出し、私の罪を探り出されるのですか。
- 7 私に悪しきことがないこと、あなたの手から救い出せる者がいないことを、あなたはご存じなのに。
- 8 あなたの手が私をかたどり、私を造られました。それなのに、私を滅ぼし尽くそうとされます。
- 9 思い出してください。あなたは私を粘土のようにして造られました。私を土のちりに戻そうとなさるのですか。
- 10 あなたは私を乳のように注ぎ出して、チーズのように固め、
- 11 皮と肉を私に着せて、骨と筋で編まれたではありませんか。
- 12 恵みをもって私にいのちを与え、あなたの顧みが私の霊を守りました。
- 13 しかし、あなたはこれらのことを心に秘めておられました。このことがあなたのうちにあるのを私は知っています。
- 14 もし、私が罪ある者となるなら、あなたは私を見張られます。こうして、私の咎を免じてはくさいません。
- 15 もし、私が悪しき者とされるのなら、ああ、なんと悲しいことでしょう。私は正しい者とされても、頭を上げることはできません。自分の恥に飽き飽きし、自分の痛みを見ているから。
- 16 頭を上げると、あなたは獅子のように私を狙い、再び私に驚くべき力をふるわれるでしょう。
- 17 あなたは私に対して証人たちを新たに立てて、私に向かって苛立ちを増し加え、いよいよ私を苦しめられるでしょう。

- 18 なぜ、あなたは私を母の胎から出されたのですか。私が息絶えていたなら、だれの目にも留まらなかったでしょう。
- 19 私は、存在しなかったかのように、母の胎から墓に運ばれていたらよかったのに。
- 20 私の生きる日はわずかなのですか。それならやめてください。私にかまわないでください。私はわずかでも明るくふるまいたいのです。
- 21 私が闇と死の陰の地に行って、再び帰って来なくなる前に。
- 22 そこは、暗闇のように真っ暗な地。死の陰があり、秩序がなく、光も暗闇のようです。」

第11章

- 1 さらに、ナアマ人ツォファルが答えた。
- 2 ことば数が多ければ、言い返されないだろうか。人は唇で義とされるのだろうか。
- 3 あなたの無駄話は、人を黙らせるだろうか。あなたが嘲るとき、あなたに恥を見させる者はいないのだろうか。
- 4 あなたは言う。「私の主張は純粹だ。私はあなたの目に清い」と。
- 5 しかし、神が語りかけ、あなたに対して唇を開いてくださっていたなら、
- 6 神は知恵の奥義をあなたに告げ、知性を倍にしてくださったであろう。知れ。神があなたのために、あなたの咎を忘れてくださることを。
- 7 あなたは神の深さを見極められるだろうか。全能者の極みを見出せるだろうか。
- 8 それは天よりも高い。あなたに何ができるだろう。それはよみよりも深い。あなたが何を知り得るだろう。
- 9 それを測ると、地よりも長く、海よりも広い。
- 10 もし、神が通り過ぎたり、閉じ込めたり、あるいは法廷を召集したりするなら、だれが神を引き止められるだろう。
- 11 確かに神は、不信実な者を知っておられる。不法を見て、それに気づかれないだろうか。
- 12 無知な人間も賢くなるだろう。野ろばの子が人として生まれるのなら。
- 13 もし、あなたが心を定め、神に向かって手を伸べ広げるなら、
- 14 もし、手に不法があればそれを遠ざけ、あなたの天幕に不正を住まわせないなら、
- 15 そのとき、あなたは欠けのない者として顔を上げることができ、堅く立って恐れることはない。
- 16 こうしてあなた自身は労苦を忘れ、これを流れ去った水のように思い出すだろう。
- 17 あなたの一生は真昼よりも輝き、闇も朝のようになる。
- 18 望みがあるので、あなたは安らぎ、守られて安らかに休む。
- 19 横になっても、あなたを脅かす者はいない。多くの者があなたの好意を求める。
- 20 しかし、悪者どもの目は衰え果て、彼らは逃れ場を失う。彼らの望みは、最後の一息にすぎない。

第12章

- 1 ヨブは答えた。

- 2 まさに、あなたがたは地の民。あなたがたとともに知恵も死ぬ。
- 3 私にも、同じように良識がある。私はあなたがたに劣っていない。これくらいのことを知らない者がいるだろうか。
- 4 私は、自分の友の笑いものとなっている。神を呼び求め、神が答えてくださった者なのに。正しく誠実な者が笑いものだ。
- 5 安らかだと思っている者はわざわいを侮る。わざわいは、足がよろめく者に用意されている。
- 6 荒らす者の天幕には安らぎがあり、神を怒らせる者は安らかだ。神がご自分の手でそうさせる者は。
- 7 しかし 獣に尋ねてみよ。あなたに教えてくれるだろう。空の鳥にも。あなたに告げてくれるだろう。
- 8 あるいは地に話しかけよ。教えてくれるだろう。海の魚も語るだろう。
- 9 これらすべてのうちで、主の御手がこれをなしたことを知らない者があるだろうか。
- 10 すべての生き物のいのちと、すべての肉なる人の息は、その御手のうちにある。
- 11 口が食物の味を知るように、耳はことばを聞き分けないだろうか。
- 12 年寄りに知恵があり、年のたけた者に英知があるのか。
- 13 知恵と力は神とともにあり、思慮と英知も神のものだ。
- 14 見よ。神が打ち壊すと、二度と建て直せない。人を閉じ込めると、開けられない。
- 15 見よ。神が引き止めると水は涸れ、水を送ると地はくつがえる。
- 16 力と英知は神とともにあり、迷い出る者も、迷わす者も神のものだ。
- 17 神は助言者たちを裸足にして連れ去り、さばく者たちを愚弄し、
- 18 王たちのかせを解き放ち、彼らの腰に帯を巻き付け、
- 19 祭司たちを裸足にして連れ去り、勢いある者に道を誤らせる。
- 20 神は、信頼されている者の唇を取り去り、長老たちの良識を取り上げ、
- 21 君主たちを侮り、力ある者たちの腰帯を解き、
- 22 闇から深みをあらわにし、暗黒を光に引き出す。
- 23 神は国々を栄えさせ、また滅ぼす。国々を広げ、また取り去る。
- 24 地の民のかしらたちから良識を取り去り、彼らを道のない荒れ地の中でさまよわせ、
- 25 彼らは光のない闇の中を、手探りで進む。神は彼らを酔いどれのようによろけさせる。

第13章

- 1 見よ。私の目はこれらすべてのことを見た。私の耳も聞いて、それを理解している。
- 2 あなたがたが知っていることは私もよく知っている。私はあなたがたより劣ってはいない。
- 3 けれども、この私は全能なる方に語りかけ、神と論じ合うことを願う。
- 4 しかし、あなたがたは偽りを塗る者、みな無用の医者だ。
- 5 ああ、あなたがたが沈黙を守っていたら、それがあなたがたの知恵となっていたらうに。
- 6 さあ、私の論じるところを聞き、私の唇の訴えに耳を傾けよ。
- 7 あなたがたは、神のためにと行って不正を語り、神のためにと行って欺くことを語るのか。

- 8 あなたがたは、神の顔を立てるつもりか。神のためにと、言い争うつもりか。
- 9 神があなたがたを調べても、かまわないのか。人を欺くように神を欺こうとするのか。
- 10 神は必ずあなたがたを責める。ひそかに自分の顔を立てようとするなら。
- 11 神の威厳があなたがたをおびえさせ、神の恐れがあなたがたに下るのではないか。
- 12 あなたがたの申し立ては灰のことば。あなたがたの弁明は粘土の盾だ。
- 13 黙れ。私に関わるな。この私が話す。私に何が降りかかってもかまわない。
- 14 何のために私は、自分の肉を歯にのせ、自分のたましいを手のひらに置くのか。
- 15 見よ。神が私を殺しても、私は神を待ち望み、なおも私の道を神の御前に主張しよう。
- 16 神もまた、私の救いとなってくださる。神を敬わない者は、御前に出ることはできない。
- 17 あなたがたは、私のことばをよく聞け。私の述べることを、自分の耳で。
- 18 今、私は自分の言い分を並べる。自分が義とされることを私は知っている。
- 19 だれか私と論争する者がいるのか。もしいるなら、今にも私は黙って息絶えよう。
- 20 ただ二つのことを、私になさらないでください。そうすれば、私は御顔から身を隠しません。
- 21 あなたの手を私の上から遠ざけてください。あなたの恐ろしさで、おびえさせないでください。
- 22 呼んでください。私が答えます。あるいは私に語らせ、あなたが返答してください。
- 23 私には、咎と罪がどれほどあるのでしょうか。私の背きと罪を私に知らせてください。
- 24 なぜ、あなたは御顔を隠し、私をあなたの敵と見なされるのですか。
- 25 あなたは吹き散らされた木の葉を脅し、乾いた藁を追いかけられるのですか。
- 26 実に、あなたは私に対し厳しい宣告を書きたて、私の若いときの咎を負い続けさせます。
- 27 あなたは私の足にかせをはめ、私が歩む道をことごとく見張り、私の足の裏にしるしを刻まれます。
- 28 そのような者は、腐った物のように朽ちます。シミが食った衣服のように。

第14章

- 1 女から生まれた人間は、その齡が短く、心乱されることで満ちています。
- 2 花のように咲き出ではしおれ、影のように逃げ去り、とどまることがありません。
- 3 このような者に対してさえあなたは目を見開き、この私をご自分とともに、さばきの座に連れて行かれるのですか。
- 4 きよい物を汚れた物から取り出せたらよいのに。しかし、だれ一人できません。
- 5 もし、人の日数が定められていて、その月の数もあなたが決めておられ、その人が越えることのできない限界をあなたが設けておられるなら、
- 6 その人から目をそらして、かまわないでください。彼が雇い人のように自分の日を楽しむために。
- 7 木には望みがある。たとえ切られても、また芽を出しその若枝は絶えることがない。
- 8 たとえ、その根が地の中で老い、その根株が土の中で死んでも、
- 9 水の潤いがあると芽を吹き出し、苗木のように枝を出す。

- 10 しかし、人は死ぬと倒れたきりだ。人間は息絶えると、どこにいるのか。
- 11 水は海から消え去り、川は干上がり、涸れる。
- 12 そのように、人は伏して起き上がらず、天がなくなるまで目覚めず、その眠りから覚めることはない。
- 13 ああ、あなたが私をよみに隠し、あなたの怒りが過ぎ去るまで私を潜ませ、私のために時を定めて、私を覚えてくださればよいのに。
- 14 人は死ぬと、また生きるでしょうか。私は苦役の日の限り、待ちます。私の代わりにがやって来るまで。
- 15 あなたが呼びになれば、お答えします。あなたは御手のわざを慕っておられるでしょう。
- 16 今、あなたは私の一步一步を数えておられます。私の罪に目を留めないでください。
- 17 私の背きを袋の中に封じ込め、私の咎をおおってください。
- 18 しかし、山は倒れて崩れ去り 岩もその場所から移されます。
- 19 水は石を打ち砕き、あなたは小石を押し流して地のちりとされます。そのように、人の望みを絶ち滅ぼされます。
- 20 あなたがいつも人に打ち勝つので、人は去って行きます。あなたは彼の顔かたちを変えて、彼を追いやられます。
- 21 自分の子どもたちが人に尊ばれても、彼がそれを知ることはなく、彼らが人に卑しめられても、彼には見分けがつきません。
- 22 ただ彼の肉が彼のために痛みを覚え、そのたましいが彼のために嘆くだけです。

第15章

- 1 テマン人エリファズが答えた。
- 2 知恵のある者は、むなしい知識によって答えるだろうか。東風で腹を満たすだろうか。
- 3 益にならないことばで、役に立たない論法で論じるだろうか。
- 4 あなたは敬虔を不要と見なし、神の御前で祈るのをおろそかにしている。
- 5 それは、あなたの咎があなたの口に教え、あなたが悪賢い人の舌を選んでいるからだ。
- 6 あなたの口があなたを不義に定める。私ではない。あなたの唇が、あなたに不利な証言をする。
- 7 あなたは最初の人間として生まれたのか。丘より先に生み出されたのか。
- 8 あなたは神との親しい交わりにあずかり、知恵をひとり占めにしているのか。
- 9 あなたが知っていることを、私たちが知らないというのか。あなたが悟っていることは、私たちのうちにはないのか。
- 10 私たちの中には、白髪の方も古老もいて、あなたの父よりもはるかに年を重ねている。
- 11 神の慰めは、あなたには不十分なのか。あなたに対して優しく語られたことばは。
- 12 なぜ、あなたは自分を見失っているのか。なぜ、あなたの目は、ぎらついているのか。
- 13 あなたが神に向かって苛立ち、口からあのようなことばを吐くとは。
- 14 どういう人が清くあり得るのか。女から生まれた者で、だれが正しくあり得るのか。
- 15 見よ、神はその聖なる者たちさえ信頼なさらぬ。天も神の目には清くない。

- 16 まして忌み嫌うべき腐り果てた者、不正を水のように飲む人間は、なおさらだ。
- 17 私はあなたに告げる。私に聞け。私が見たことを述べよう。
- 18 それは知恵のある者たちが告げたこと、その先祖には隠されなかったことだ。
- 19 彼らだけに、この地は与えられ、他国人が彼らの間を通り過ぎることはなかった。
- 20 悪しき者は一生もだえ苦しむ。横暴な者には、ある年数が知らされずにいる。
- 21 その耳には恐ろしい音が聞こえ、平和なときにも、荒らす者が彼を襲う。
- 22 彼は自分が闇から帰って来られるとは信じない。彼はいつも剣につけ狙われている。
- 23 食物を求めて、「どこにあるか」とさまよい歩き、闇の日が間近に用意されているのを知っている。
- 24 苦難と苦悩は彼をおびえさせ、戦いの備えができた王のように彼を圧倒する。
- 25 それは、彼が神に対して手向かい、全能者に対して尊大にふるまい、
- 26 分厚い盾を取って、傲慢にも神に向かって突き進むからだ。
- 27 彼が顔を脂でおおい、腰の周りを脂肪で膨れさせたとしても、
- 28 彼は、消し去られた町、人の住んでいない家に、瓦礫の山となるところに住む。
- 29 彼は富むこともなく、自分の財産も長く持たず、それがもたらす収益は地に広がらない。
- 30 彼は闇から離れられず、炎がその若枝を枯らし、神の御口の息によって追い払われる。
- 31 迷わされて、むなしいことに信頼するな。その報いはむなしいからだ。
- 32 彼の時が来ないうちに報いはなされ、その葉が緑になることはない。
- 33 ぶどうの木のように、その未熟な実は落とされ、オリーブのように、その花は振り落とされる。
- 34 神を敬わない者の仲間には実りがなく、賄賂の天幕は火で焼き尽くされるからだ。
- 35 彼らは害悪をはらみ、不法を産み、その腹は欺きを準備している。

第16章

- 1 ヨブは答えた。
- 2 そのようなことは、私は何度も聞いた。あなたがたはみな、人をみじめにする慰め手だ。
- 3 むなしいことばには終わりがあるのか。あなたは何に挑発されて答え続けるのか。
- 4 私も、あなたがたのように語るができる。もし、あなたがたが私の立場にあったなら、あなたがたに向かって私は多くのことばを連ね、あなたがたに向かって頭を振ったことだろう。
- 5 この口であなたがたを強くし、唇による慰めを惜しまなかったことだろう。
- 6 たとえ私が語っても、私の痛みは抑えられません。たとえ私が忍んでも、どれだけ私からそれが去るでしょう。
- 7 まことに神は今、私を疲れ果てさせました。あなたは、私の仲間をみな荒れ果てさせました。
- 8 あなたは私をつかみました。自分の痩せ衰えた姿が証人となり、私に向かって立ち上がり、面と向かって不利な証言をします。

- 9 神は激怒して私を攻めたて、私に向かって齒をむき出される。私の敵は私に向かって目を鋭くする。
- 10 彼らは私に向かって大きく口を開け、そしりをもって私の頬を打ち、こぞって私を攻める。
- 11 神は私を不遜な者に引き渡し、悪しき者の手に投げ込まれる。
- 12 私は平穏でいたのに、神は私を引き回された。首筋をつかんで私を粉々にし、そうして、ご自分の標的とされた。
- 13 その射手たちは私を包囲した。神は私の腎臓を容赦なく射抜き、私の胆汁を地に流された。
- 14 神は私を打ち、打ち破って、勇士のように私に襲いかかれる。
- 15 私は粗布を肌に縫い付け、自分の角をちりの中に突き刺した。
- 16 私の顔は泣きはらして赤くなり、まぶたには死の陰がある。
- 17 私の手には暴虐がなく、私の祈りはきよいのだが。
- 18 地よ、私の血をおおうな。私の叫びに休み場がないようにせよ。
- 19 今でも、天には私の証人がおられます。私の保証人が、高い所に。
- 20 私の友は私を嘲る者たち。しかし、私の目は神に向かって涙を流します。
- 21 その方が、人のために神にとりなしてくださいますように。人の子がその友のためにするやうに。
- 22 数年もたてば、私は帰らぬ旅路につくのですから。

第17章

- 1 私の霊は乱れ、私の日は尽き、私には墓場があるだけです。
- 2 実に、嘲る者たちが私とともにいます。私の目は彼らの敵意の中で夜を過ごします。
- 3 どうか、私を保証してくれる人をあなたのそばに置いてください。ほかにだれか誓ってくれる人がいるでしょうか。
- 4 あなたはあの者たちの心を賢明さから引き離されました。ですから、あなたが彼らを高く上げられることはありません。
- 5 分け前を得るために友の告げ口をする者。その子らの目は衰え果てる。
- 6 神は私を人々の笑いものとされ、私は顔に唾される者となった。
- 7 私の目は苦悶でかすみ、私のからだはどこも影のようだ。
- 8 心の直ぐな人はこのことに驚き恐れ、潔白な人は神を敬わない者に向かって憤る。
- 9 正しい人は自分の道を保ち、手のきよい人は強さを増し加える。
- 10 だが、あなたがたはみな 帰って来るがよい。私はあなたがたの中に、知恵のある者を一人も見出さないだろう。
- 11 私の日は過ぎ去り、私の企て、私の心の願いも砕かれた。
- 12 「夜は昼に変わり、闇のあるところに光が近づく」と人は言う。
- 13 しかし私が、よみを自分の住まいとして望み、闇に自分の寝床を広げ、
- 14 その穴に向かって「あなたは私の父」と言い、うじ虫に向かって「あなたは私の母、私の姉妹」と宣言するなら、
- 15 いったい、どこに私の望みがあるのか。だれが私の望みを目にするのか。

16 それらがよみの戸口に下ったとしても、私たちがともに、ちりの上に降りたとしても。

第18章

- 1 シュア八人ビルダデが答えた。
- 2 いつになったら、あなたがたはその話にけりをつけるのか。まず理解せよ。それから語り合おうではないか。
- 3 なぜ、私たちは獣のように見なされ、あなたがたには愚かに見えるのか。
- 4 怒って自分自身を引き裂く者よ、あなたのために地が見捨てられるだろうか。岩がその場所から移されるだろうか。
- 5 まことに、悪しき者の光は消え、その火の炎も輝くことはない。
- 6 彼の天幕の内では光が暗くなり、彼を照らすともしびも消える。
- 7 彼の力強い歩幅は狭められ、自らのはかりごとが彼を打ち倒す。
- 8 彼は自分の足で網にかかり、その網目の上を歩き回る。
- 9 罨は彼のかかとを捕らえ、仕掛け網は彼を捕まえる。
- 10 地には彼を捕まえる縄が隠されている。捕らえるための罨が通り道に。
- 11 突然の恐怖が彼を周りからおびえさせ、その足を追い立てる。
- 12 彼の精力は飢えて衰え、わざわざいが彼をつまづかせようとする。
- 13 わざわいは彼の皮膚を食らおうとし、死の初子がからだを食らおうとする。
- 14 彼は、抛り頼んでいる天幕から引き抜かれ、恐怖の王のもとへと引き立てられる。
- 15 彼の天幕には、身内でない者が住み、硫黄がその住まいの上にまき散らされる。
- 16 下では彼の根が枯れ、上では枝がしおれる。
- 17 彼の記憶は地から消え失せ、地の面では無名となる。
- 18 彼は光から闇に追いやられ、世から追い出される。
- 19 彼の民の中には子孫も末裔もいなくなり、その住みかには一人の生存者もいなくなる。
- 20 西に住む者は彼の日について驚き恐れ、東に住む者は恐怖に取りつかれる。
- 21 まことに、これが不正を働く者の住まい、これが神を知らない者の住む場所である。

第19章

- 1 ヨブは答えた。
- 2 いつまで、あなたがたは私のたましいを悩ませ、ことばで私を砕くのか。
- 3 もう十度もあなたがたは私を辱め、私をいじめて恥じることもない。
- 4 私が本当に過ちに陥っていたとしても、私の過ちは私のうちにとどまるだけだ。
- 5 もし、本当にあなたがたが私に向かって高ぶり、私が受けた恥辱のことで、私を責めるつもりなら、
- 6 今知れ。神が私を不当に扱い、ご自分の網で私を取り囲まれたことを。
- 7 見よ。私が「暴虐だ」と叫んでも、答えはなく、叫び求めても、さばきは行われぬ。
- 8 神は私の道をふさいで通らせず、私の通り道に闇を置かれた。
- 9 神は私から栄光をはぎ取り、頭から冠を取り去られた。

- 10 神は四方から私を打ち倒し、私は消え去る。神は私の望みを木のように根こそぎにされる。
- 11 神は私に向かって怒りを燃やし、私をご自分の敵のように見なされる。
- 12 その軍勢は一つとなって進んで来て、私に向かって傾斜路を築き上げ、私の天幕の周りに陣を敷く。
- 13 神は私の兄弟たちを私から遠ざけ、知人たちはすっかり私から離れて行った。
- 14 親族は見放し、親しい友も私を忘れた。
- 15 私の家に身を寄せる者や召使いの女たちも、私をよそ者のように見なし、私は彼らの目に他人となった。
- 16 私がしもべを呼んでも、彼は返事もしない。私は自分の口で彼に懇願しなければならない。
- 17 私の息は妻にいやがられ、身内の者たちに嫌われる。
- 18 若輩までが私を蔑み、私が立ち上がると、私に言い逆らう。
- 19 親しい仲間はみな私を忌み嫌い、私が愛した人たちも私に背を向けた。
- 20 私は、骨が皮と肉にくっつき、かろうじて生き延びている。
- 21 あなたがた、私の友よ。あわれんでくれ。私をあわれんでくれ。神の御手が私を打ったからだ。
- 22 なぜ、神のように私を追いつめるのか。なぜ、私の肉で満足しないのか。
- 23 ああ今、できることなら、私のことばが書かれ、書物に記されればよいのに。
- 24 鉄の筆と鉛によって、いつまでも岩に刻みつけられればよいのに。
- 25 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついには、土のちりの上に立たれることを。
- 26 私の皮がこのように剥ぎ取られた後に、私は私の肉から神を見る。
- 27 この方を私は自分自身で見る。私自身の目がこの方を見る。ほかの者ではない。私の思いは胸の内で絶え入るばかりだ。
- 28 あなたがたが、「彼をどのように追いつめようか。事の原因は彼にあるのだから」と言うなら、
- 29 あなたがたは剣を恐れよ。憤りが剣による刑罰をもたらすからだ。こうして、あなたがたはさばきがあることを知るようになる。

第20章

- 1 ナアマ人ツォファルは答えた。
- 2 こうだから、苛立つ思いが私に応答させるのだ。私の心の焦りのゆえに。
- 3 私は自分への侮辱となる訓戒を聞く。だから、悟りを与える霊が私に答えを促すのだ。
- 4 あなたは確かに知っているはずだ。昔から、人が地の上に置かれてから、
- 5 悪しき者の喜びは短く、神を敬わない者の楽しみは束の間だ。
- 6 たとえ、その者の高ぶりが天にまで上り、その頭が濃い雲にまで達しても、
- 7 彼は自分の糞のようにすっかり滅び去る。かつて彼を見た者は「彼はどこにいるか」と言う。
- 8 彼は夢のように飛び去り、だれにも見つからない。彼は夜の幻のように追い払われる。
- 9 彼を見慣れていた目は、再び彼を見ることなく、彼の家も、もはや彼を見ない。

- 10 彼の子らは貧しい人たちにあわれみを乞い、彼は自分の手で、自分の富を元に戻す。
- 11 彼の骨は若さに満ちていても、彼とともに土のちりの上に横たわることになる。
- 12 たとえ悪が口に甘く、彼がそれを舌の裏に隠していても、
- 13 あるいはそれを惜しんで捨てようとせず、口の奥にとどめていても、
- 14 彼が食べた物は腹の中で変わり、彼の内側でコブラの毒となる。
- 15 富を呑み込んでも、彼はまたそれを吐き出す。神がそれを彼の腹から出される。
- 16 彼はコブラの毒を吸い、まむしの舌が彼を殺す。
- 17 彼は豊かな水の流れを見ることがない。蜜と凝乳の流れる川を。
- 18 労苦して得たものも、呑み込まずに返し、商いで得た富も楽しめない。
- 19 彼が弱い者を踏みにじって見捨て、自分で建てたのではない家を奪い取ったからだ。
- 20 彼の腹は満足することを知らないなので、欲しがっている物を、何一つ逃さない。
- 21 彼が食べるためのものは何も残っていない。それゆえ、彼の繁栄は長くは続かない。
- 22 彼は、豊かさが満ちるときに苦境に立たされ、労苦する者の手がことごとく彼に押し寄せ
る。
- 23 彼が腹を満たそうとすると、神は燃える怒りを彼に送り、憤りを彼の上に降らせる。
- 24 彼が鉄の武器を逃れても、青銅の弓が彼を射抜く。
- 25 矢が貫いて背中から出、きらめく矢じりが貫いて肝から出る。恐怖が彼の上に臨む。
- 26 すべての闇が彼の宝として隠され、吹き起こしたのではない火が彼をなめ尽くし、彼の天幕
に生き残っている者も痛手を被る。
- 27 天は彼の咎をあらわにし、地は彼に逆らって立つ。
- 28 彼の家の作物はさらわれ、御怒りの日に消え失せる。
- 29 これが悪しき人間が神から受ける分、神によって定められた、彼の受け継ぐものである。

第21章

- 1 ヨブは答えた。
- 2 私の言い分をよく聞いてくれ。それを、あなたがたから私への慰めにしてくれ。
- 3 まず、この私が話すのを許してくれ。私が話し終わってから、あなたは嘲るがよい。
- 4 この私の不平は人に向かってであろうか。なぜ、私が苛立ってはならないのか。
- 5 私の方を向いてくれ。驚き恐れよ。そして手を口に当てよ。
- 6 私はそのことを思い出すとおびえ、戦慄でからだが震える。
- 7 なぜ悪しき者が生きながらえて年をとっても、なお力を増し加えるのか。
- 8 その子孫は彼らとともにあって、彼らの前に堅く立ち、その末裔は彼らの目の前に堅く立
つ。
- 9 彼らの家は平和で恐れもなく、神のむちが彼らの上に下されることもない。
- 10 その雄牛は、はらませて失敗することがなく、その雌牛は、子を産んで仕損じることがな
い。
- 11 彼らは幼子たちを羊の群れのように自由にさせ、彼らの子どもたちは飛び跳ねる。
- 12 彼らはタンバリンや豎琴に合わせて歌い、笛の音で楽しむ。

- 13 幸せのうちに寿命を全うし、安らかによみに下る。
- 14 彼らは神に向かって言う。「私たちから離れよ。私たちは、あなたの道を知りたくない。
- 15 全能者とは何なのか。私たちが仕えなければならないとは。どんな益があるのか。私たちが彼に祈り願ったところで」と。
- 16 見よ、彼らの繁栄はその手の中にはない。悪者のはかりごとは、私とは何の関係もない。
- 17 幾たび、悪者どものともしびが消え、破局が彼らの上に臨み、神が怒って彼らに滅びを分け与えられることか。
- 18 彼らは風の前の藁のようではないか。つむじ風が吹き散らす籾殻のようではないか。
- 19 神がそのような者の子らのために、わざわいを秘めておられるというのか。その人自身が報いを受けて、思い知らなければならないのだ。
- 20 その人自身の目が自分の滅びを見、自分が全能者の憤りを呑まなければならない。
- 21 自分の日数が限られているのに、なぜ自分の後の家のことを気にかけるのか。
- 22 人が神に知識を教えようとするのか。神は、高ぶる者たちにさばきを下されるのだ。
- 23 ある者は元気盛りの時に死ぬ。全く安らかに、平穩のうちに。
- 24 そのからだは脂ぎって、骨の髄まで潤っている。
- 25 しかし、ある者は苦悩のうちに死ぬ。幸せを味わうこともなく。
- 26 両者はともに土のちりに伏し、うじ虫が彼らをおおう。
- 27 確かに私は、あなたがたの計画を知っている。私を不当に扱おうとする企みを。
- 28 あなたがたは言う。「高貴な人の家はどこにあるか。悪しき者たちが住んだ天幕はどこにあるか」と。
- 29 あなたがたは道行く人たちに尋ねなかったのか。彼らの証しをよく調べたことはないのか。
- 30 悪人がわざわいの日を免れ、激しい怒りの日から連れ出されるというのか。
- 31 だれが面と向かって、彼の行くべき道を告げることができるのか。彼がしたことに対して、だれが報いることができるのか。
- 32 彼は墓場に運ばれ、その塚の上には見張りが立てられる。
- 33 谷の土くれは彼には快く、すべての人間が彼の後について行き、彼の先には数えきれない人がいる。
- 34 それなのに、どうしてあなたがたは 空しいことばで私を慰めようとするのか。あなたがたの応答は、不信実以外の何でもない。

第22章

- 1 テマン人エリファズが答えた。
- 2 人は神の役に立てるだろうか。賢い人でさえ、ただ自分自身の役に立つだけだ。
- 3 あなたが正しいからといって、それが全能者の喜びとなるだろうか。あなたの行いが全きものであるからといって、それが神にとって益になるだろうか。
- 4 あなたが神を恐れているためか。神があなたを責められるのは、神があなたとともに さばきの座に入っていくのは。
- 5 いや、それはあなたの悪が大きく、あなたの不義に際限がないからではないか。

- 6 あなたは理由もなく兄弟から質物を取り、着ている物をはぎ取って裸にし、
- 7 疲れている人に水を飲ませず、飢えている人に食物を拒んだからだ。
- 8 土地を所有している有力者のように、そこに住む、名のある者のように、
- 9 あなたはやもめを手ぶらで去らせ、みなしごたちの腕を折った。
- 10 そのため畏があなたを取り巻き、恐れが突然あなたを脅かすのだ。
- 11 あるいは、闇のために見ることもできなくなり、みなぎる水があなたをおおうのだ。
- 12 神は天の高きにおられるではないか。星々の頂を見よ。それらはなんと高いことか。
- 13 あなたは言う。「神に何が分かるだろうか。黒雲の中からさばくことができるだろうか。
- 14 濃い雲が覆いとなって、神は見ることができない。神は天空を歩き回るだけだ」と。
- 15 あなたは昔からの道を守って行くのか。悪人どもが歩んだあの道を。
- 16 彼らは年若くして取り去られ、彼らの土台は流れに押し流された。
- 17 彼らは神に向かって、「私たちから離れてくれ」と言った。全能者は彼らに何をなさるだろうか。
- 18 しかし神は、彼らの家を良き物で満たされた。だが、悪者のはかりごとは私と何の関係もない。
- 19 正しい者は見て喜び、潔白な者は彼らを嘲って言う。
- 20 「まことに、私たちに向かい立った者は滅ぼされ、悪人どもが残した物は火が焼き尽くした」と。
- 21 さあ、あなたは神と和らぎ、平安を得よ。そうすれば幸いがあなたのところに来るだろう。
- 22 神の口からみおしえを受け、そのみことばを心にとどめよ。
- 23 もし全能者に立ち返るなら、あなたは再び立ち直る。自分の天幕から不正を遠ざけるなら。
- 24 あなたは黄金を土のちりの上に置け。オフィルの金を川の小石の間に。
- 25 そうすれば全能者はあなたの黄金となり、あなたにとっての尊い銀となる。
- 26 そのとき必ず、あなたは全能者を自分の喜びとし、神に向かって顔を上げることができる。
- 27 あなたが神に祈ると、神はあなたに聞き、あなたは自分の誓願を果たすことができる。
- 28 あなたが事を決めると、それは成り、あなたの道の上には光が輝く。
- 29 彼らが気落ちすれば、あなたは「勇気を出せ」と言う。こうして、へりくだっている者は救われる。
- 30 潔白でない者さえ助け出され、あなたの手のきよさによって逃れる。

第23章

- 1 ヨブは答えた。
- 2 今日もまた、私の嘆きは激しく、自分のうめきのゆえに私の手は重い。
- 3 ああ、できるなら、どこで神に会えるかを知って、その御座にまで行きたいものだ。
- 4 私は神の御前に自分の言い分を並べて、ことばを尽くして訴えたい。
- 5 神が私に答えることばを知り、神が私に言われることをわきまえ知りたい。
- 6 神は強い力で私と争われるだろうか。いや、むしろ私に心を留めてくださるだろう。
- 7 そこでは正直な人が神と論じ合うことができ、私は、とこしえにさばきを免れるだろう。

- 8 だが見よ。私が前へ進んでも、神はおられず、うしろに行っても、神を認めることができない。
- 9 左に向かっても、神を見ることはなく、右に向きを変えても、会うことができない。
- 10 しかし神は、私の行く道を知っておられる。私は試されると、金のようになって出て来る。
- 11 私の足は神の歩みにつき従い、神の道を守って、それたことがない。
- 12 私は神の唇の命令から離れず、自分の定めよりも神の口のことばを蓄えた。
- 13 しかし、みこころは一つである。だれがその御思いを翻せるだろうか。神はご自分が欲するところを行われる。
- 14 神は、私について定めたことを成し遂げられる。神にはそのような多くの定めがあるからだ。
- 15 それで私は、神の御前でおびえ、思いを巡らして、神を恐れているのだ。
- 16 神は私の心を弱くされた。全能者が私をおびえさせられたのだ。
- 17 しかし、闇によって私が黙らされることはない。私の顔が暗黒におおわれていても。

第24章

- 1 なぜ、全能者に時が隠されていないのに、神を知る者たちには神の日々が見られないのか。
- 2 人々は地境を動かし、群れを奪ってこれを飼う。
- 3 みなしごのろばを連れ去り、やもめの牛を質に取り、
- 4 貧しい者たちを道から押し除ける。地の苦しむ者たちは、すっかりおおい隠される。
- 5 その人たちは荒野の野ろばのように、働きに出ては獲物を探す。荒れた地で、子たちのために食べ物を探して。
- 6 野で自分の飼葉を刈り取り、悪しき者のぶどう畑で残り物を集める。
- 7 着る物もなく、裸で夜を明かし、寒さの中でも身をおおう物がない。
- 8 山の嵐でずぶぬれになり、避け所もなく、岩を抱く。
- 9 みなしごは乳房から引き離され、貧しい者が持つ物は質に取られる。
- 10 着る物もなく裸で歩き、飢えながら麦束を運ぶ。
- 11 オリーブの植え込みの間に油を搾り、踏み場でぶどうを踏みながらも、なお渴く。
- 12 人の住む町からうめき声が起こり、傷ついた者のたましいが助けを求めて叫ぶ。しかし、神はその叫び声に心を留められない。
- 13 これらの者は光に背く者。光の道を認めず、光の通り道にとどまろうとしない。
- 14 人殺しは、光のある間に起き上がり、苦しむ人や貧しい人を殺して、夜には盗人となる。
- 15 姦通する者の目も、夕暮れ時を見張り、「だれの目も私に気づかない」と言いながら、自分の顔に覆いをする。
- 16 彼は暗くなってから家々に侵入する。昼間は閉じこもっていて光を知らない。
- 17 朝はことごとく、彼のような者には暗黒である。彼は暗黒の恐怖と親しいからだ。
- 18 彼のような者は水の面をすばやく通り過ぎ、彼らの割り当て地はその地でのろわれる。だれも彼らのぶどう畑の道に向かわない。
- 19 日照りと暑さは雪解け水を、よみは罪を犯した者を奪い去る。

- 20 母の胎は彼を忘れ、うじ虫は彼を好んで食べる。彼はもう思い出されることはない。不正な者は木のように折られる。
- 21 彼は、子を産まない不妊の女を食いものにし、やもめに良くしない。
- 22 彼は力をもって、権力者たちを引きずり降ろす。彼自身は台頭するが、自分にいのちのあることが信じられない。
- 23 神が彼に安全を与えるので、彼は支えられる。しかし、神の目は彼らの道の上に注がれる。
- 24 彼らはしばらくの間高められるが、いなくなる。低くされ、すべての者と同じく刈り集められる。そして麦の穂先のように枯れる。
- 25 今そうでないからといって、だれが私をまやかし者だと言えるのか。だれが私のことばをたわごとと見なせるのか。

第25章

- 1 シュア八人ビルダデが答えた。
- 2 主権と恐れは神のもの。神はその高い所で平和をつくられる。
- 3 その軍勢の数には限りがあるだろうか。その光に照らされない者がいるだろうか。
- 4 人はどうして神の前に正しくあり得るだろうか。女から生まれた者が、どうして清くあり得るだろうか。
- 5 ああ、神の目には月さえ輝きがなく、星も清くない。
- 6 まして、うじ虫でしかない人間、虫けらでしかない人の子はなおさらだ。

第26章

- 1 ヨブは答えた。
- 2 あなたは無力な者をどのように助けたのか。力のない腕をどのように救ったのか。
- 3 知恵のない者にどのように助言し、知性を豊かに示したのか。
- 4 だれに対してことばを告げたのか。だれの息があなたから出たのか。
- 5 死者の霊たち、水に住む者たちはその底で、もだえ苦しむ。
- 6 よみも神の前では裸であり、滅びの淵もおおわれることはない。
- 7 神は北を、茫漠としたところに張り広げ、地を、何もないところに掛けられる。
- 8 神は水を濃い雲の中に包まれるが、雲はその下で裂けることはない。
- 9 神は満月の面をおおい、その上に雲を広げ、
- 10 水の面に円を描いて、光と闇との境とされた。
- 11 天の柱は揺らぎ、神の叱責に驚愕する。
- 12 神は御力によって海を鎮め、ご自分の英知をもってラハブを打ち砕かれる。
- 13 その息によって天は晴れ渡り、御手は逃げる蛇を刺し殺す。
- 14 見よ、これらは神のみわざの外側にすぎない。私たちは神についてささやきしか聞いていない。御力を示す雷を、だれが理解できるだろうか。

第27章

- 1 ヨブはさらに言い分を続けた。
- 2 私は、私の権利を取り去った神にかけて誓う。私のたましいを苦しめた全能者にかけて。
- 3 私の息が私のうちにあり、神の霊が私の鼻にあるかぎり、
- 4 私の唇は決して不正を言わず、私の舌は決して欺くことを語らない。
- 5 あなたがたを正しいとすることなど、私には絶対にできない。私は息絶えるまで、自分の誠実さをこの身から離さない。
- 6 私は自分の義を堅く保って手放さない。私の良心は生涯私を責めはしない。
- 7 私の敵は悪しき者のようになれ。向かい立つ者たちは不正を働く者のようになれ。
- 8 神を敬わない者に、どのような望みがあるのか。神が彼を断ち切り、いのちを取り去るときには。
- 9 苦しみが彼に降りかかるとき、神は彼の叫びを聞かれるであろうか。
- 10 彼は全能者を自分の喜びとするだろうか。どんなときにも神を呼び求めるだろうか。
- 11 私は、神の御手にあることをあなたがたに教え、全能者のもとにあるものを隠さない。
- 12 あなたがたは、全員がそれを見たのに、なぜ、全く空しいことを言うのか。
- 13 悪しき人間が神から受ける分、横暴な者が全能者から受け継ぐものは次のとおりだ。
- 14 たとえ子どもが増えても、剣にかかり、子孫が食べ物に満ち足りることはない。
- 15 その生き残りも死んで葬られ、やもめたちは泣きもしない。
- 16 彼が金をちりのように積み上げ、衣装を土のように蓄えても、
- 17 蓄えたものは、正しい者がこれを着て、金は、潔白な者が分ける。
- 18 彼はシミの巣のような家を建てる。番人が作る仮小屋のような家を。
- 19 富む者として床につくが、もうそれきりだ。目を開けると、もう何も無い。
- 20 突然の恐怖が洪水のように襲い、夜にはつむじ風が彼を運び去る。
- 21 東風が彼を運ぶと、彼はいなくなり、その居場所から彼を吹き払う。
- 22 それは容赦なく襲いかかり、彼はその手から必死に逃れようとする。
- 23 それは彼に向かって手をたたき、彼を嘲って、その居場所から追い出す。

第28章

- 1 まことに、銀には鉱山があり、金には精錬する場所がある。
- 2 鉄は土から取られ、銅は鉱石を溶かして取る。
- 3 人は闇の果てに、その極みにまで行って、暗闇と暗黒にある鉱石を探し出す。
- 4 彼は、人里離れたところで縦坑を掘り進み、行き交う人に忘れられ、人々から離れたところで、ぶら下がって揺れる。
- 5 地はそこから食物を産み出すが、その下は火のように沸き返っている。
- 6 その鉱石からサファイアが出る。その場所には金のちりがある。
- 7 その通り道は猛禽も知らず、隼の目もこれを狙ったことがない。
- 8 誇り高き獣たちもこれを踏まず、たける獅子も通ったことがない。

- 9 彼は硬い岩にまで手を加え、山々をその根底からくつがえす。
- 10 彼は岩に坑道を切り開き、あらゆる宝石を目にする。
- 11 彼は水が滴ることもないように川をせき止め、隠されていた物を明るみに出す。
- 12 しかし知恵はどこで見つかるのか。悟りがある場所はどこか。
- 13 人にはその価値が分からない。それは生ける者の地では見つからない。
- 14 深淵は言う。「私の中にはそれはない。」海は言う。「私のところにはない。」
- 15 それは純金をもってしても得られない。銀を量ってその代価とすることもできない。
- 16 オフィルの金によっても値踏みできない。高価な縞めのうや、サファイアによっても。
- 17 金もガラスもこれと並ぶことができず、純金の器とも取り替えられない。
- 18 珊瑚や水晶は言うに及ばず、知恵の価値は真珠にもまさる。
- 19 クシュのトパーズもこれと並ぶことができず、純金でもその値踏みをするにはできない。
- 20 では、知恵はどこから来るのか。悟りがある場所はどこか。
- 21 それはすべての生き物の目に隠され、空の鳥にも隠れている。
- 22 滅びの淵も、死も言う。「そのうわさは、この耳で聞いたことがある。」
- 23 神は知恵の道をご存じであり、神こそ、それが場所を知っておられる。
- 24 それは、神が地の隅々までを見渡し、天の下をことごとく見ておられるからだ。
- 25 神は風に重さを与え、水を秤で量られた。
- 26 神は雨のために法則を、稲光のために道を決められた。
- 27 そのとき、神は知恵を見て、これを見積もり、これを確かめ、調べ上げられた。
- 28 こうして、神は人間に仰せられた。「見よ。主を恐れること、これが知恵であり、悪から遠ざかること、これが悟りである」と。

第29章

- 1 ヨブはさらに言い分を続けた。
- 2 ああ、できることなら、昔の月日のようであつたらよいのに。神が私を守ってくださった日々のもようであつたらよいのに。
- 3 あのとて、神はともしびを私の頭上に照らし、神の光によって私は闇の中を歩いた。
- 4 私がまだ壮年であつたころ、私の天幕の中には神との親しい交わりがあつた。
- 5 全能者がまだ私とともにおられたとき、私の子どもたちが周りにいた。
- 6 あのとて、私の足は凝乳に浸され、岩は私に、油の流れを豊かに注ぎ出してくれた。
- 7 私は町の門に出て行き、広場に自分の座る所を設けた。
- 8 すると、若者たちは私を見て身を引き、年老いた者も起きてまっすぐに立った。
- 9 首長たちは話すのを控え、手を口に当てた。
- 10 君主たちの声もひそまり、その舌は上あごについた。
- 11 私のことを聞いた耳は、私を称賛し、私を見た目は、私の証人となつた。
- 12 それは私が、叫び求める苦しむ人を、身寄りのないみなしごを助け出したからだ。
- 13 死にかかっている者からの祝福が私に届き、やもめの心を私は喜ばせた。
- 14 私は義をまとい、義は私をおおつた。私の公正さは上着であり、かぶり物であつた。

- 15 私は目の見えない人の目となり、足の萎えた人の足となった。
- 16 私は貧しい人の父となり、見知らぬ人の訴訟を取り上げ、調べてあげた。
- 17 また不正を働く者の牙を砕き、その歯の間から獲物を奪い返した。
- 18 そこで私はこう思った。「私は自分の巣とともに息絶えるが、自分の日数を砂のように増やす。
- 19 私の根は水に向かって伸び広がり、夜露が私の枝に宿る。
- 20 私の栄光は私とともに新しくなり、私の弓は私の手によって次々と矢を放つ」と。
- 21 人々は期待して私の言うことに聞き入り、私の助言に黙って従った。
- 22 私が語った後にはだれも言い返さず、私のことばは彼らの上に降り注いだ。
- 23 彼らは雨を待つように私を待ち、後の雨を待つように、口を大きく開けて待った。
- 24 私が彼らにほほえみかけると、彼らはそのことを信じるができなかった。彼らが私の顔の光を陰らせることはなかった。
- 25 私は彼らの行くべき道を選んでやり、首長のように座に着いた。また、軍勢とともにある王のように住み、嘆き悲しむ人を慰める者のようであった。

第30章

- 1 しかし今は、私より年下の者たちが私をあざ笑う。あの者たちの父は、かつて私が蔑んで羊の群れの番犬と一緒にいさせた人たちだ。
- 2 あの者たちの手の力も何の役に立つだろうか。彼らの気力は失せている。
- 3 彼らは欠乏と飢饉で干上がり、乾いた土にさえかじりつく。荒れ果てた廃墟の暗闇で。
- 4 彼らは陸ひじきや藪の葉を摘み、えにしだの根を食物とする。
- 5 世間からは追い出され、人々は盗人に叫ぶように、彼らに大声で叫ぶ。
- 6 谷の斜面や、土の穴、岩の穴に住み、
- 7 藪の中でいなき、いらくさの下に群がる。
- 8 彼らは愚か者の子たち、名もない者の子たち、国からむちでたたき出された者たちだ。
- 9 それなのに、今や私は彼らの嘲りの的となり、その笑いぐさとなっている。
- 10 彼らは私を忌み嫌って遠く離れ、私の顔に向かって情け容赦なく唾を吐きかける。
- 11 神が私の弓弦を解いて私を苦しめ、彼らが自分の綱を私の前で投げ捨てたのだ。
- 12 この生意気な者たちは私の右手に立ち、私の足をもつれさせ、私に対して滅びの道を築いた。
- 13 彼らは私の通り道を打ち壊し、私の滅びを進めている。彼らに助ける者はいない。
- 14 彼らは、広い破れ口から入るように、瓦礫となったところになだれ込む。
- 15 突然の恐怖が私に降りかかり、私の威厳を、あの風のように吹き払う。私の平穩は、雨雲のように過ぎ去った。
- 16 今、私のたましいは自分に注がれている。苦しみの日々が私をとらえたからだ。
- 17 夜は私から骨をえぐり取り、私をむしばむものは休まない。
- 18 神は大きな力で私の衣服に姿を変え、まるで長服の襟のように私に巻き付かれる。
- 19 神は泥の中に私を投げ込まれ、私はちりや灰のようになった。

- 20 私があなたに向かって叫んでも、あなたはお答えになりません。私が立っていても、あなたは私に目を留めてくださいません。
- 21 あなたは、私にとって残酷な方になり、御手の力で、私を攻めたてられます。
- 22 あなたは私を吹き上げて風に乗せ、すぐれた知性で、私を翻弄されます。
- 23 私は知っています。あなたが私を死に帰らせることを。すべての生き物が集まる家に。
- 24 それでも、瓦礫の中で人は手を伸ばさないだろうか。災難にあって助けを求めて叫ぶときに。
- 25 私は不運な人のために、泣かなかっただろうか。私のたましいは貧しい人のために、心を痛めなかつただろうか。
- 26 私は善を望んだのに、悪が来た。光を待ったのに、暗闇が来た。
- 27 私のはらわたは、休みなくかき回され、苦しみの日が私に立ち向かっている。
- 28 私は日にも当たらず、泣き悲しんで歩き回り、集いの中に立って助けを叫び求める。
- 29 私はジャッカルの兄弟となり、だちょうの仲間となった。
- 30 私の皮膚は黒ずんで剥げ落ち、骨は熱で焼けている。
- 31 私の豎琴は喪のためとなり、私の笛は泣き悲しむ者の声となった。

第31章

- 1 私は自分の目と契約を結んだ。どうしておとめに目を留められるだろうか。
- 2 神が上から分けてくださる取り分は何か。全能者が高い所から下さる相続のものは。
- 3 不正を働く者にはわざわいが、不法を行う者には災難が来るではないか。
- 4 神は私の道をご覧にならないだろうか。私の歩みをすべて数えておられないだろうか。
- 5 もし、私が偽りとともに歩み、この足が欺きに急いだのなら、
- 6 神は私を正しい秤で量られればよい。そうすれば神に私の誠実さが分かるだろう。
- 7 もし、私の歩みが道からそれ、私の心が自分の目に従って歩み、私の手に汚れがついていたなら、
- 8 私が種を蒔いて、ほかの人が食べるがよい。私の作物は根こそぎにされるがよい。
- 9 もし、私の心が女に惑わされ、隣人の戸口で待ち伏せしたことがあったなら、
- 10 私の妻が他人のために粉をひいてもよい。また、他人が彼女と寝てもよい。
- 11 これは恥ずべき行い、裁判で罰せられるべき不義であるからだ。
- 12 実に、それは滅びの淵まで焼き尽くす火だ。私の収穫をことごとく根こそぎにする。
- 13 もし、しもべや召使いの女が私と争ったとき、私が彼らの訴えを拒んだことがあるなら、
- 14 神が立たれるとき、私はどうすればよいか。また、神がお調べになるとき、何と答えたらよいか。
- 15 私を胎内で造られた方は、彼らをも造られたのではないか。同じ方が、私たちを母の胎内に形造られたのではないか。
- 16 もし、私が弱い者たちの望みを退け、やもめの目を衰え果てさせ、
- 17 私一人だけでパンを食べ、みなしごにそれを食べさせなかつたのなら、

- 18 一実は私の幼いときから、弱い者は私を父のようにして育ち、私は生まれたときから、やもめを導いた—
- 19 あるいは、もし私が、着る物がなくて死にかかっている人や、身をおおう物を持たない貧しい人を見たとき、
- 20 その人の腰が私にあいさつをすることも、私の子羊の毛で彼が暖められることもなかったなら、
- 21 あるいは、私が門のところに助け手を見て、みなしごに向かって手を振り上げたことがあったなら、
- 22 私の肩の骨が肩から落ち、私の腕がつけ根から折れてもよい。
- 23 神からのわざわいが私をおののかせ、その威力のゆえに、私は何もできないだろう。
- 24 もし、私が金を自分の頼みとし、黄金に向かって「私の抛り頼むもの」と言ったことがあるなら、
- 25 あるいは、私の富が多いことや、私の手が多くを得たことを喜んだことがあるなら、
- 26 あるいは、日の光が輝くのを、月が照りながら動くのを見て、
- 27 ひそかに心を惑わされ、手で口づけを投げかけたことがあるなら、
- 28 これもまた、裁判で罰せられるべき不義だ。私が、上なる神を否んだのだから。
- 29 あるいは、私を憎む者が衰えたのを喜び、彼にわざわいが下ったことに心躍らせたことがあるだろうか。
- 30 私は自分の口を罪に任せなかった。のろいの誓いで彼のいのちを求めたりして。
- 31 私の天幕の者たちはみな、こう言っているではないか。「あの方のパンに満腹しなかった者がいったいいるだろうか。」
- 32 寄留者は外で夜を過ごさず、私は戸口を通りに向けて開けている。
- 33 あるいは私がアダムのように、自分の背きをおおい隠し、自分の咎を胸の中に秘めたことがあるだろうか。
- 34 私が群衆の騒ぎにおびえ、一族の蔑みにひるみ、黙っていて、門を出なかったことがあるだろうか。
- 35 だれか、私の言うことを聞いてくれる者はいないものか。—ここに私の署名がある。全能者が私に答えてくださるよう—私を訴える者が書いた告訴状があれば、
- 36 私はそれを肩に担ぎ、冠のように、それをこの身に結び付け、
- 37 私の歩みの数をこの方に告げ、君主のようにしてこの方に近づきたい。
- 38 もし、私の土地が私に向かって叫び、その敵がともに泣くことがあるなら、
- 39 あるいは私が金を払わずにその産物を食べ、その持ち主のいのちを失わせたことがあるなら、
- 40 小麦の代わりに茨が、大麦の代わりに雑草が生えるように。ヨブのことばは終わった。

第32章

- 1 この三人はヨブに答えるのをやめた。ヨブが自分を正しいと思っていたからである。
- 2 すると、ラム族のブズ人、バラクエルの子エリフが怒りを燃やした。彼は、ヨブが神よりも自分自身のほうを義としたので、ヨブに向かって怒りを燃やしたのである。

- 3 彼はまた、その三人の友に向かっても怒りを燃やした。彼らがヨブを不義に定めながら、言い返せなかったからである。
- 4 エリフは、彼らが自分よりも年長だったので、ヨブに語りかける時を待っていた。
- 5 エリフは三人の者の口に答えがないのを見て、怒りを燃やした。
- 6 ブズ人、バラクエルの子エリフは答えて言った。私は年が若く、あなたがたは年をとっている。だから私はわきに控え、遠慮してあなたがたに私の意見を述べなかった。
- 7 私は思った。「日を重ねた者が語り、年の多い者が知恵を教えるのだ」と。
- 8 確かに、人の中には霊があり、全能者の息が人に悟りを与える。
- 9 だが、年長者が知恵深いわけではない。老人が道理をわきまえているわけでもない。
- 10 だから私は言う。「私の言うことを聞いてくれ。私も自分の意見を述べよう。」
- 11 今まで私はあなたがたの言うことに期待し、あなたがたの意見に耳を傾けていた。あなたがたがことばを探している間、
- 12 私はあなたがたに細心の注意を払っていた。しかし、あなたがたのうちには、ヨブを叱責する者も、彼のことばに答える者もいなかった。
- 13 だが、おそらくあなたがたは言うだろう。「私たちは知恵を見出した。人ではなく、神が彼を吹き払ったのだ」と。
- 14 彼はまだ私に向かって、ことばを並べ立ててはいない。私はあなたがたのような言い方では彼に答えることはしない。
- 15 彼らは意気をそがれて、もう答えない。彼らの言うことばもなくなった。
- 16 彼らが話さず、じっと立って答えないからといって、私は待っていなければならないのか。
- 17 私は私で自分の言い分を返し、私も自分の意見を述べよう。
- 18 私にはことばがあふれていて、内なる霊が私を圧迫しているからだ。
- 19 今、私の腹は抜け口の無いぶどう酒のよう。新しい皮袋のように、張り裂けようとしている。
- 20 私は話して、気分を晴らしたい。唇を開いて答えたい。
- 21 私はだれも、えこひいきしない。どんな人にも、へつらったりしない。
- 22 私はへつらうことを知らないし、そんなことをすれば、私を造った方は、すぐにでも私を取り去ってしまわれるだろう。

第33章

- 1 そこでヨブよ、どうか私の言い分を聞いてほしい。私のすべてのことばに耳を傾けてほしい。
- 2 さあ、私は口を開き、私の口の中の舌が語る。
- 3 私の言うことは、直ぐな心から出る。私の唇は、率直に知識を語る。
- 4 神の霊が私を造り、全能者の息が私にいのちを下さる。
- 5 あなたにできるのであれば、私に返事をし、ことばを並べ立てて、私の前に立ってみよ。
- 6 実に、神にとって、私はあなたと同様だ。私もまた粘土で形造られた。
- 7 見よ、私の脅しも、あなたをおびえさせない。あなたに私の力がのしかかっても、重くはない。

- 8 確かにあなたは、この耳に言った。私はあなたの話す声を聞いた。
- 9 「私はきよく、背きがない。私は純潔であり、咎もない。
- 10 それなのに、神は私を攻める口実を見つけ、私を神の敵のように見なされる。
- 11 神は私の足にかせをはめ、私の歩みをことごとく見張られる。」
- 12 聞け。私はあなたに答える。このことであなたは正しくない。神は人よりも偉大なのだから。
- 13 なぜ、あなたは神と言い争うのか。自分のことばに、神がいちいち答えてくださらないからといって。
- 14 神はある方法で語り、また、ほかの方法で語られるが、人はそれに気づかない。
- 15 夢の中で、夜の幻の中で、深い眠りが人々を襲うとき、また寝床の上でまどろむとき、
- 16 そのとき、神はその人たちの耳を開き、彼らを懲らしめて、それを封印される。
- 17 神は、人間がその悪いわざを取り除くようにし、人から高ぶりを離れさせ、
- 18 人のたましいが滅びの穴に入らず、そのいのちが投げ槍で滅びないようにされる。
- 19 神は、床の上で痛みをもって人を責め、いつまでも続く骨の病によってお叱りになる。
- 20 彼のいのちは食物を嫌い、そのたましいはうまい物を嫌う。
- 21 その肉は衰え果てて見えなくなり、見えなかった骨があらわになる。
- 22 そのたましいは滅びの穴に、そのいのちは殺す者たちに近づく。
- 23 もし彼のそばに、一人の御使いが、千人に一人の仲介者がいて、その方が彼に代わって彼が誠実であることを告げてくれるなら、
- 24 神は彼をあわれんで仰せられる。「彼を救って、滅びの穴に下って行かないようにせよ。わたしは身代金を見出した」と。
- 25 その肉は幼子のように新しくされて、彼は青年のころに戻る。
- 26 彼は、神に祈ると受け入れられる。彼は歓喜の声をもち御顔を仰ぎ、神はその人の義に報いてくださる。
- 27 彼は人々を見つめて言う。「私は罪ある者で、真っ直ぐなことを曲げてきた。しかし私は、当然の報いを受けなかった。
- 28 神は、私が滅びの穴に下らないように、私のたましいを贖い出してくださった。私のいのちは光を見ることができると。
- 29 見よ、このすべてのことを神は行われる。二度も三度も、人に対して。
- 30 人のたましいを滅びの穴から引き戻し、いのちの光で照らされる。
- 31 ヨブよ、耳を傾けて私に聞け。黙れ。この私が語る。
- 32 もし、ことばがあるなら、私に返事をせよ。言え。あなたが正しければ、それを私は喜ぶから。
- 33 もし、ことばがないなら、私に聞け。黙れ。私はあなたに知恵を教えよう。

第34章

- 1 エリフはさらに言った。
- 2 知恵のある人々よ、私のことばを聞け。知識のある人々よ、私に耳を傾けよ。

- 3 耳はことばを聞き分け、口は食物を味わうからだ。
- 4 さあ、私たちのために正しいことを選び、私たちの間で、何が良いことかをよく知ろう。
- 5 ヨブはこう言っているからだ。「私は正しい。神が私の正義を取り去ったのだ。
- 6 私の正義に反して、私は偽りを言えるだろうか。背きがないのに、私の矢傷は治らない。」
- 7 ヨブのような人がほかにいるだろうか。彼は嘲りを水のように飲み、
- 8 不法を行う者どもとよく交わり、悪人たちとともに歩む。
- 9 彼は言っている。「神に喜ばれようとしても、それは人の役に立たない。」
- 10 だから、あなたがた良識のある人々よ、私に聞け。神が悪を行うなど、全能者が不正をするなど、絶対にあり得ない。
- 11 神は、人の行いに応じて報いをし、それぞれをその道にしたがって取り扱われる。
- 12 神は決して悪を行わない。全能者はさばきを曲げない。
- 13 だれが、この地を神にゆだねたのか。だれが、全世界を神に任せたのか。
- 14 もし、神がご自分だけに心を留め、その霊と息をご自分に集められたら、
- 15 すべての肉なるものはともに息絶え、人は土のちりに帰る。
- 16 悟ることができるなら、これを聞け。私の言うことに耳を傾けよ。
- 17 いったい、公正を憎む者が、治めることができるだろうか。正しく力ある方を不義に定めることができるだろうか。
- 18 人が王に向かって「よこしまな者」と言い、高貴な人に向かって「悪者」と言えるだろうか。
- 19 この方は、首長たちをえこひいきせず、上流の人を貧しい民より重んじることはない。彼らはみな、神の御手のわざだからだ。
- 20 彼らは瞬く間に、それも真夜中に死に、民は動揺のうちにいなくなる。強い者たちも人の手によらずに取り去られる。
- 21 神の御目が人の道の上であり、その歩みのすべてを神が見ておられるからだ。
- 22 不法を行う者どもが身を隠せる闇はなく、暗黒もない。
- 23 神は人について、それ以上調べる必要はない。さばきのときに、神の前に出させてまでして。
- 24 神は力ある者を、取り調べなしに打ち滅ぼし、彼らに代えてほかの者たちを立てられる。
- 25 神は彼らのしわざを知っており、夜に彼らを打ち倒される。彼らは砕かれる。
- 26 神は、人々の見ているところで、彼らをその邪悪さのゆえに打ちたたかれる。
- 27 それは、彼らが神に背いて従わず、神のどの道にも心を留めなかったからだ。
- 28 こうして、弱い者の叫びを神に届け、神は苦しむ者たちの叫びを聞き入れられる。
- 29 神が黙っておられるなら、だれがとがめることができるだろうか。神が御顔を隠しておられるなら、だれが神を認めることができるだろうか。一つの国民においても、一人の人間においても同様だ。
- 30 それは、神を敬わない人間が治めたり、民を畏にかけたりしないようにするためだ。
- 31 神に向かってだれかが言ったか。「私は懲らしめを受けました。私はもう悪いことはいたしません。

- 32 私が見ていないことを、あなたが私に教えてください。私が不正をしたのであれば、もういたしません」と。
- 33 あなたが反対するからといって、神はあなたの願うとおりに報復されるだろうか。私ではなく、あなたが選ぶがよい。あなたの知っていることを言うがよい。
- 34 良識のある人々や、私に聞く、知恵のある人は私に言うだろう。
- 35 「ヨブは知識もなしに語る。彼のことばは聡明さに欠けている」と。
- 36 どうか、ヨブが最後まで試されるように。彼は不法者のように、ことばを返すからだ。
- 37 彼は自分の罪にさらに背きを加え、私たちの間で手を打ち鳴らし、神に対してことば数を多くする。

第35章

- 1 エリフはさらに言った。
- 2 あなたは、このことが正義によると見なしているのか。「私の義は神からだ」とでも言うのか。
- 3 というのは、あなたがこう言っているからだ。「何があなたの役に立つのでしょうか。私が罪から離れると、どんな利益があるのでしょうか」と。
- 4 私はあなたにことばを返そう。あなたとともにいる友人たちにも。
- 5 天を仰ぎ見よ。あなたより、はるかに高い雲をよく見よ。
- 6 あなたが罪を犯したとしても、あなたは神に対して何ができるのか。あなたの背きが多くあるとしても、神に対して何をなし得るのか。
- 7 あなたが正しかったとしても、神に何を与えられるのか。神は、あなたの手から何を受けられるのか。
- 8 あなたの悪は、ただあなたのような人間に、あなたの正しさは、人の子に関わるだけだ。
- 9 人々は、激しい抑圧のために泣き叫び、偉大な者の腕のために、助けを叫び求める。
- 10 しかし、だれも問わない。「私の造り主である神はどこにおられるのか。夜、ほめ歌を下さる方は。
- 11 地の獣に教えるより、私たちに多くを教え、空の鳥より、私たちを賢くする方は」と。
- 12 そこでは、彼らが泣き叫んでも神は答えない。悪人がおごり高ぶっているからだ。
- 13 神は決して偽りの叫びを聞き入れず、全能者はこれに心を留めない。
- 14 「神を見られない」とあなたが言うときには、なおさらだ。しかし訴えは神の前にある。あなたは神を待て。
- 15 しかし今、神は怒って罰しないだろうか。ひどい罪を知らずにいるだろうか。
- 16 ヨブは空しい口を開き、知識もなしに、自分の言い分を並べ立てている。

第36章

- 1 エリフはさらに続けて言った。
- 2 しばらく待て。あなたに示そう。まだ神のために言い分があるからだ。
- 3 私は遠くから私の意見を持って来て、私の造り主に義を返そう。

- 4 まことに、私の言い分は偽りではない。知識の完全な方が、あなたのそばにおられるのだ。
- 5 見よ。神は強いが、だれをも蔑まれない。その理解の力は強い。
- 6 神は悪しき者を生かしてはおかず、苦しむ者には権利を与えられる。
- 7 神は正しい者から目を離さず、彼らを王座にある王たちとともに、永遠に座に着かせる。こうして彼らは高くなる。
- 8 もし、彼らが鎖で縛られ、苦しみの縄に捕らえられたら、
- 9 神は彼らの行いを彼らに告げられる。彼らの背きを。彼らがおごり高ぶったからである。
- 10 神は彼らの耳を開いて戒め、不法から立ち返るように命じる。
- 11 もし彼らが聞き入れて神に仕えるなら、彼らは自分の日々を幸せのうちに、自分の年々を楽しみのうちに全うする。
- 12 しかし、もし聞き入れなければ、彼らは槍によって滅び、知識のないまま息絶える。
- 13 心で神を敬わない者は怒りを蓄え、神が彼らを縛るときでも、助けを叫び求めない。
- 14 彼らは若くして死に、そのいのちは腐れている。
- 15 神は苦しむ人をその苦しみの中で助け出し、抑圧の中で彼らの耳を開かれる。
- 16 神はまた、あなたを苦難の中から誘い出し、束縛のない広いところに導かれる。豊かな食物が備えられた、食卓での安らぎに。
- 17 あなたには悪しき者へのさばきが満ちている。さばきと公正があなたを捕らえる。
- 18 だからあなたは、憤って、豊かさに誘い込まれないようにせよ。身代金が多いからといって、それに惑わされないようにせよ。
- 19 あなたの叫びが並べ立てられても、力の限り尽くされても、それは役に立たないのではないか。
- 20 人々が取り去られる夜を、あえぎ求めてはならない。
- 21 不法に向かわないように注意せよ。あなたは苦しみよりも、これを選んだのだから。
- 22 見よ、神は力にすぐれておられる。神のような教師が、だれがいるだろうか。
- 23 だれが神にその道を指図したのか。だれが「あなたは不正をした」と言ったのか。
- 24 神のみわざを覚えて賛美せよ。人々がほめ歌った、そのみわざを。
- 25 すべての人がこれを見、人が遠くからこれを眺める。
- 26 見よ。神はいと高く、私たちには知ることができない。その年の数も測り知ることができない。
- 27 神は水のしずくを引き上げ、それが雨を滴らせて、水の流れとなる。
- 28 雨雲がこれを降らせ、人の上に豊かに滴らせる。
- 29 いったい、だれが濃い雲の広がりど、その幕屋のとどろきを理解できるだろうか。
- 30 見よ。神はご自分の光をその上に照り渡らせ、また、海の底をおおわれる。
- 31 神はこれらによって民をさばき、食物を豊かにお与えになる。
- 32 神は稲妻を両手に包み、これに命じて的を撃たせられる。
- 33 その雷鳴は、神について告げ、家畜もまた、起こることについて告げる。

第37章

- 1 これによって私の心は震え、そこから離れ去るほどだ。
- 2 よく聞け。その御声が荒れ狂うのを。その御口から出るとどろきを。
- 3 神は、天の下のいたるところで放たれる。その稲妻を、地の隅々までも。
- 4 その後で雷が鳴りとどろく。神はいかめしい声で雷鳴をとどろかせ、その御声が聞こえるとき、手加減をなさない。
- 5 神は御声で、驚くほどに雷鳴をとどろかせ、私たちの知り得ない大きなことをされる。
- 6 神は雪に対して、地に降りと命じ、夕立に、激しい大雨にも命じられる。
- 7 神はすべての人の手を封じ込められる。神の造った人間が知るために。
- 8 獣は巣にもぐり、洞穴の中に入づくまる。
- 9 つむじ風は天の間から、寒さは北の方から来る。
- 10 神の息によって氷が張り、広々とした水が凍りつく。
- 11 神は濃い雲に水気を含ませ、雲がその稲妻を放つ。
- 12 それは神の指図によって巡り回り、事を行う。神が命じるすべてのことを、世界の地の面で。
- 13 神は、懲らしめのため、ご自分の地のため、または恵みのために、これが起こるようにされる。
- 14 ヨブよ、これに耳を傾けよ。神の奇しいみわざを、立ち止まって考えよ。
- 15 あなたは知っているか。神がどのようにこれらに命じ、その雲に稲妻をひらめかせられるのかを。
- 16 あなたは知っているか。濃い雲のつり合いを、知識の完全な方の不思議なみわざを。
- 17 また、南風で地が黙するとき、あなたの衣がいかに熱くなるかを。
- 18 あなたは大空を神とともに張り上げられるのか。鑄た鏡のように硬いものを。
- 19 神に何と言うべきかを私たちに教えよ。闇があるので、ことばを並べることができない。
- 20 私が語りたいと、神に伝えられるだろうか。人がことばを発すれば、その人は必ず滅ぼされる。
- 21 今、光は見ることができない。それは雨雲の中に輝いている。しかし、風が吹いて雲を払いのけると、
- 22 北から黄金の輝きが現れ、神の周りには恐るべき威厳がある。
- 23 私たちが見出すことのできない全能者は、力にすぐれた方。さばきと正義に富み、苦しめることをなさない。
- 24 だから、人々は神を恐れなければならない。神は心に知恵ある者を顧みられないだろうか。

第38章

- 1 主は嵐の中からヨブに答えられた。
- 2 知識もなしに言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。
- 3 さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。
- 4 わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。分かっているなら、告げてみよ。

- 5 あなたは知っているはずだ。だれがその大きさを定め、だれがその上に測り縄を張ったかを。
- 6 その台座は何の上にはめ込まれたのか。あるいは、その要の石はだれが据えたのか。
- 7 明けの星々がともに喜び歌い、神の子たちがみな喜び叫んだときに。
- 8 海が噴き出て、胎内から流れ出たとき、だれが戸でこれを閉じ込めたのか。
- 9 そのとき、わたしは雲をその衣とし、暗黒をその産衣とした。
- 10 わたしは、これを区切って境を定め、かんぬきと戸を設けて、
- 11 言った。「ここまでは来てもよい。しかし、これ以上はいけない。おまえの高ぶる波はここでとどまれ」と。
- 12 あなたは生まれてこのかた、朝に対して命令を下し、暁に対してあるべき場所を指し示して、
- 13 これに地の縁をつかませ、悪しき者をそこから振り落としたことがあるか。
- 14 地は押印された粘土のように姿を変え、そこにあるものは王服のように彩られる。
- 15 その光は悪しき者から退けられ、振り上げられた腕は折られる。
- 16 あなたは海の源まで行ったことがあるか。深淵の奥底を歩き回ったことがあるか。
- 17 死の門があなたに現れたことがあるか。死の陰の門を見たことがあるか。
- 18 地の広さを見極めたことがあるか。そのすべてを知っているなら、告げてみよ。
- 19 光の住む所への道はどこか。闇のあるその場所はどこか。
- 20 光をその国境まで連れて行くというのか。闇の家に至る通りを見分けるというのか。
- 21 あなたはよく知っているはずだ。そのとき、あなたは生まれていて、あなたの日数は多いのだから。
- 22 あなたは雪の倉に入ったことがあるか。雹の倉を見たことがあるか。
- 23 これらは、わたしがとどめているのだ。苦難の時のため、争いと戦の日のために。
- 24 光が分かれる道はどこか。東風が地の上で分かれ広がる道は。
- 25 だれが、大水のために水路を、稲光のために道を切り開き、
- 26 人のいない地、人間のいない荒野に雨を降らせ、
- 27 荒れ果てた廢墟の地を満ち足らせ、それに若草を生えさせるのか。
- 28 雨に父があるのか。露のしずくはだれが生んだのか。
- 29 氷はだれの胎から出て来たのか。空の白い霜はだれが生んだのか。
- 30 水は姿を変えて石のようになり、深い淵の面は凍る。
- 31 あなたはすばるの鎖を結ぶことができるか。オリオン座の綱を解くことができるか。
- 32 あなたは十二宮をその時にかなって、引き出すことができるか。牡牛座をその子の星とともに導くことができるか。
- 33 あなたは天の掟を知っているか。地にその法則を立てることができるか。
- 34 あなたの声を密雲にまであげ、みなぎる水にあなたをおおわせることができるか。
- 35 あなたは稲妻を向こうに行かせ、あなたに向かって「私たちはここです」と言わせることができるか。
- 36 だれが、隠されたところに知恵を置いたのか。だれが、秘められたところに悟りを与えたのか。

- 37 だれが知恵をもって、雨雲を数えることができるか。だれが天の水袋を傾けることができるか。
- 38 土が溶け合って塊となり、土くれが硬く固まるときに。
- 39 あなたは雌獅子のために獲物を狩り若い獅子の食欲を満たすことができるか。
- 40 それらが洞穴に伏し、茂みの中で待ち伏せしているときに。
- 41 烏に餌を備えるのはだれか。烏の子が神に向かって鳴き叫び、食物がなくてさまようときに。

第39章

- 1 あなたは岩間の野やぎが子を産む時を知っているか。雌鹿が子を産むのを見守ったことがあるか。
- 2 あなたはこれらがはらんでいる月を、数えることができるか。それらが子を産む時を知っているか。
- 3 それらは身をかがめて子を産み落とし、その胎児を放り出す。
- 4 その子たちは強くなり、野で大きくなる。すると出て行って、元のところには帰らない。
- 5 だれが野ろばを解き放ったのか。だれが野生のろばの綱をほどいたのか。
- 6 わたしが、荒れた地をその家とし、不毛の地をその住みかとしたのだ。
- 7 それは町の騒ぎをあざ笑い、追い立てる者の叫び声を聞かない。
- 8 山々を自分の牧場として歩き回り、青草なら何でも探し求める。
- 9 野牛が喜んであなたに仕えるだろうか。あなたの飼葉桶のそばで夜を過ごすだろうか。
- 10 あなたはあぜ溝で、野牛に手綱をかけることができるか。それが、あなたに従って谷間を耕すだろうか。
- 11 その力が強いからといって、あなたはそれに抛り頼むだろうか。あなた自身の働きをこれに任せるだろうか。
- 12 あなたはそう信じているのか。それがあなたの穀物を持ち帰り、あなたの打ち場で、これを集めるとでも。
- 13 だちょうは翼を誇らしげに羽ばたかせるが、その羽はこうのとりの羽毛のようだろうか。
- 14 だちょうは卵を地面に置き去りにし、これを砂の上で温まるに任せ、
- 15 自分の足がそれをつぶすかもしれないことを忘れている。野の獣が踏みつけるかもしれないことも。
- 16 だちょうは自分の子を、自分のものでないかのように荒く扱い、その産みの苦しみが、無駄になることも全く気にしない。
- 17 神がこれに知恵を忘れさせ、これに悟りを授けなかったからだ。
- 18 それが高く飛び跳ねるとき、馬とその乗り手をあざ笑う。
- 19 あなたが馬に力を与えるのか。その首にたてがみを付けるのか。
- 20 あなたはこれを、いなごのように飛び跳ねさせることができるのか。その威厳あるいなごきは恐ろしい。
- 21 馬は谷間で、前かきをして力を喜び、武器に立ち向かって進んで行く。
- 22 恐怖をあざ笑って、ひるむことなく、剣の前から退くことはない。

- 23 矢筒はその上でうなり、槍と投げ槍はきらめく。
- 24 荒れ狂って、地を駆け回り、角笛の音に、じっとしてはいられない。
- 25 角笛が鳴るごとに、ヒヒーンといななき、遠くから戦いを嗅ぎつける。隊長の怒号、ときの声さえも。
- 26 あなたの考えによってか。鷹が舞い上がり、南にその翼を広げるのは。
- 27 あなたの命令によってか。鷲が高く上がり、その巣を高いところに作るのは。
- 28 それは岩場に宿って住み、近寄りがたい切り立つ岩の上にいる。
- 29 そこから獲物をうかがい、その目は遠くまで見渡す。
- 30 ひなは血を吸い、殺されたもののところに、それはいる。

第40章

- 1 主はヨブに答えられた。
- 2 非難する者が全能者と争おうとするのか。神を責める者は、それに答えよ。
- 3 ヨブは主に答えた。
- 4 ああ、私は取るに足りない者です。あなたに何と口答えできるでしょう。私はただ手を口に当てるばかりです。
- 5 一度、私は語りました。もう答えません。二度、語りました。もう繰り返しません。
- 6 主は嵐の中からヨブに答えられた。
- 7 さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。
- 8 あなたはわたしのさばきを無効にするつもりか。自分を義とするため、わたしを不義に定めるのか。
- 9 あなたには神のような腕があるのか。神のような声で雷鳴をとどろき渡らせるのか。
- 10 さあ、誉れと気高さで身を飾り、威厳と威光を身にまとえ。
- 11 あなたの激しい怒りを吐き散らし、すべて高ぶる者を見て、これを低くせよ。
- 12 すべて高ぶる者を見て、これを押さえ、悪者どもを、その場で踏みにじれ。
- 13 彼らをともし土のちりの中に隠し、その顔を隠れた所につなぎとめよ。
- 14 そうすれば、わたしもあなたをたたえて言う。「あなたの右の手は自分を救うことができる」と。
- 15 さあ、河馬を見よ。これはあなたと並べてわたしが造ったもの。牛のように草をはむ。
- 16 見よ。その力は腰にあり、その強さは腹の筋にある。
- 17 尾は杉の木のように垂れ下がり、ももの筋は絡み合っている。
- 18 骨は青銅の管、肋骨は鉄の棒のようだ。
- 19 これは神の作品の第一のもの、これを造った者が、その剣でこれに近づく。
- 20 山々はこの獣のために産物をもたらし、野の獣もみなそこで戯れる。
- 21 蓮の下にそれは横たわる。葦の茂み、沼地の中で。
- 22 蓮はこれをその陰でおおい、川の柳はこれを囲む。
- 23 たとえ川があふれても、慌てない。ヨルダン川が口に注ぎ込んでも、動じない。
- 24 その目をつかんで、これを捕らえられるか。畏にかけて、その鼻を突き通せるか。

第41章

- 1 あなたは釣り針で レビヤタンを釣り上げることができるか。 輪縄でその舌を押さえつけることができるか。
- 2 あなたは葦をその鼻に通すことができるか。 鉤をそのあごに突き通すことができるか。
- 3 これが、しきりにあなたに哀願し、 優しく語りかけるだろうか。
- 4 これがあなたと契約を結び、 あなたがこれを捕らえて、 永久に奴隷とすることになるだろうか。
- 5 あなたは鳥と戯れるように、これと戯れ、 娘たちのために、これをつなぐことができるか。
- 6 漁師仲間がこれを競りにかけ、 商人たちの間で分けるだろうか。
- 7 あなたは鋸でその皮を、 やすでその頭を突くことができるだろうか。
- 8 その上にあなたの手を置いてみよ。 その戦いを思い出して、二度と手を出すな。
- 9 見よ。それに立ち向かう期待は裏切られる。 それを見ただけで圧倒されるではないか。
- 10 それを起こすほどの狂暴な者はいない。 そうであれば、だれがいったい、 わたしの前に立つことができるだろうか。
- 11 だれが、まずわたしに与えたというのか。 わたしがそれに報いなければならないほどに。 天の下にあるものはみな、わたしのものだ。
- 12 そのからだの部分について わたしは黙ってはいられない。 その力強さと、その体格の見事さについて。
- 13 だれが、その外套をはぎ取ることができるか。 胸当ての折り目の間に入れることができるか。
- 14 だれが、その顔の戸を開けることができるか。 その歯の周りには恐怖がある。
- 15 その背は並んだ盾、 封印したように固く閉じている。
- 16 一つ一つぴったり付いて、 風もその間を通れない。
- 17 互いにくっつき、 固くつながって離れない。
- 18 そのくしゃみは光を放ち、 その目は暁のまぶたのようだ。
- 19 その口からは、たいまつが燃え出し、 火花が噴き出す。
- 20 その鼻からは煙が出て、 煮え立つ釜や、燃える葦のようだ。
- 21 その息は炭火をおこし、 その口からは炎が出る。
- 22 その首には力が宿り、 その前には恐れが踊る。
- 23 その肉のひだはつなぎ合わされ、 その身に固く付いて、揺るがない。
- 24 その心臓は石のように硬く、 臼の下石のように硬い。
- 25 それが起き上がると、力ある者もおじけづき、 おろおろして逃げ惑う。
- 26 それを剣で襲っても無駄だ。 槍でも、投げ矢でも、矢じりでも。
- 27 それは鉄を藁のように、 青銅を腐った木のように見なす。
- 28 矢によっても、それが逃げるようにはできず、 石投げの石も、それには藁となる。
- 29 こん棒さえ藁のように見なし、 投げ槍のうなる音をあざ笑う。
- 30 その下腹は鋭い土器のかけら、 それは打穀機のように泥の上に身を伸ばす。
- 31 それは深みを釜のように沸き立たせ、 海を、香油をかき混ぜる鍋のようにする。
- 32 それが通った跡には光が輝き、 深淵は白髪のように見なされる。

33 地の上に、これと似たものはなく、恐れを知らないものとして造られた。

34 高いものすべてを見下ろし、誇り高い獣すべての王である。

第42章

1 ヨブは主に答えた。

2 あなたには、すべてのことができること、どのような計画も不可能ではないことを、私は知りました。

3 あなたは言われます。「知識もなしに摂理をおおい隠す者はだれか」と。確かに私は、自分の理解できないことを告げてしまいました。自分では知り得ない、あまりにも不思議なことを。

4 あなたは言われます。「さあ、聞け。わたしが語る。わたしがあなたに尋ねる。わたしに示せ」と。

5 私はあなたのことを耳で聞いていました。しかし今、私の目があなたを見ました。

6 それで、私は自分を蔑み、悔いています。ちりと灰の中で。

7 主がこれらのことばをヨブに語った後、主はテマン人エリファズに言われた。「わたしの怒りはあなたとあなたの二人の友に向かって燃える。あなたがたが、わたしのしもべヨブのように、わたしについて確かなことを語らなかったからだ。

8 今、あなたがたは雄牛七頭と雄羊七匹を取って、わたしのしもべヨブのところに行き、自分たちのために全焼のささげ物を献げよ。わたしのしもべヨブがあなたがたのために祈る。わたしは彼の願いを受け入れるので、あなたがたの愚行に報いるようなことはしない。あなたがたは、わたしのしもべヨブのように、わたしについて確かなことを語らなかったが。」

9 テマン人エリファズと、シュア八人ビルダデと、ナアマ人ツォファルは行って、主が彼らに命じられたようにした。すると主はヨブの願いを受け入れられた。

10 ヨブがその友人たちのために祈ったとき、主はヨブを元どおりにされた。さらに主はヨブの財産をすべて、二倍にされた。

11 こうして彼のすべての兄弟、すべての姉妹、それに以前のすべての知人は、彼のところに来て、彼の家で一緒に食事をした。そして彼に同情し、主が彼の上にもたらされたすべてのわざわいについて、彼を慰めた。彼らはそれぞれ一ケシタと金の輪一つずつを彼に与えた。

12 主はヨブの後の半生を前の半生に増して祝福された。それで彼は羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。

13 また、息子七人、娘三人を持った。

14 彼はその第一の娘をエミマ、第二の娘をケツィア、第三の娘をケレン・ハ・プクと名づけた。

15 ヨブの娘たちほど美しい女は、この地のどこにも見つからなかった。彼女たちの父は彼女たちに、その兄弟たちの間で相続地を分け与えた。

16 この後ヨブは百四十年生き、自分の子と、その子の子たちを四代目まで見た。

17 こうしてヨブは死んだ。年老いて満ち足りた生涯であった。